

## 第V章 内容確認調査

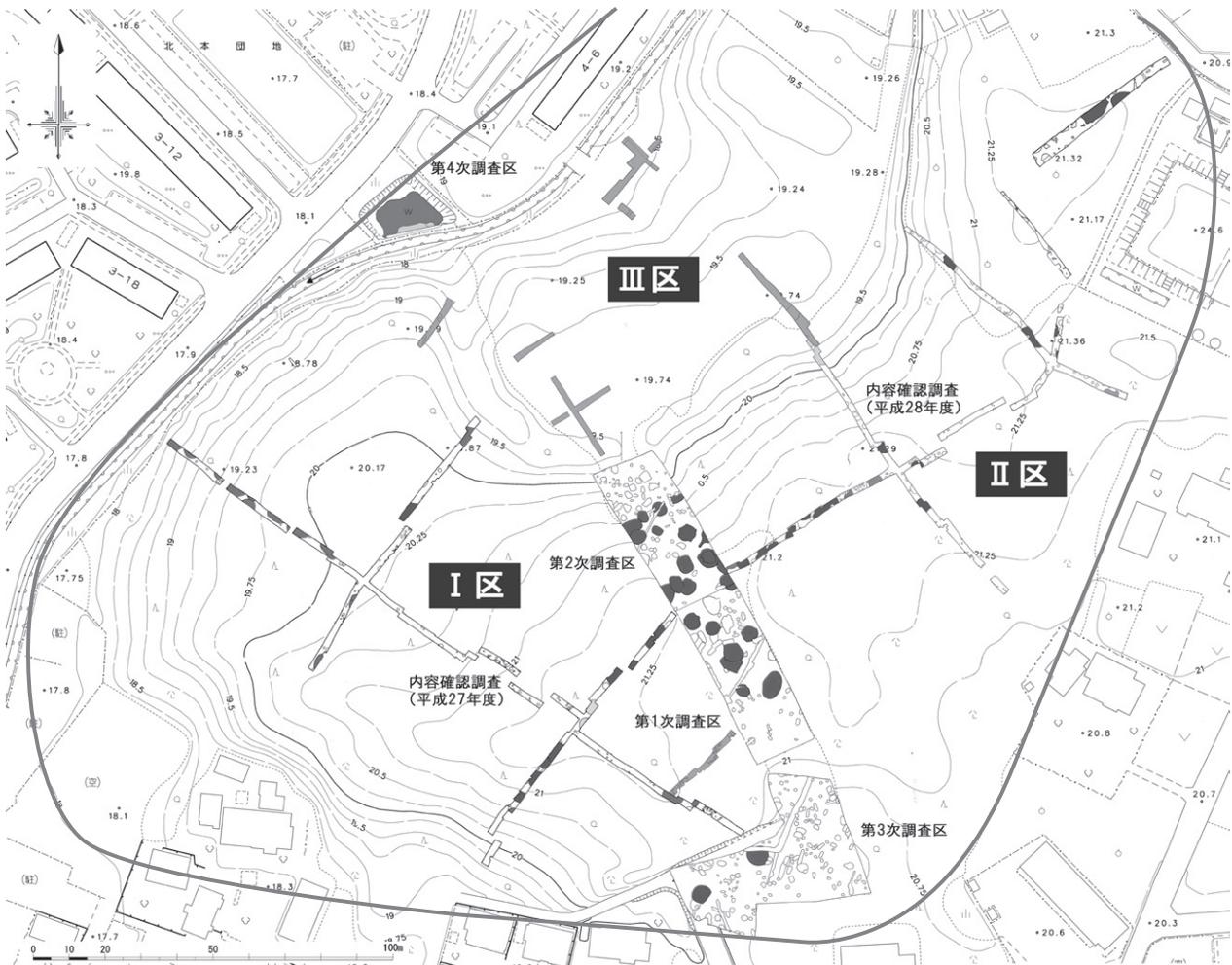
### 第1節 調査の概要

遺跡内の遺構分布や規模、遺存状態等を調査するために、平成27～29年度にかけて大規模な内容確認調査を行った。便宜的に縄文中期の集落を調査するためにトレンチを設定した箇所をI区とした。同様に後期集落の調査範囲をII区、台地の低位面から低地にかけての調査エリアをIII区とした。

以下、それぞれの遺構確認状態、出土遺物について記述する。

### 第2節 I区の調査

調査は、遺跡の南西部に展開すると考えられる縄文時代中期後半の集落の範囲、規模、構造を明らかにするために実施した。調査にあたっては、幅2mのトレンチを環状集落と想定される範囲を対象に、南北方向に1本と東西方向に2本、「キ」の字形に設定して行った。また、適宜小規模なトレンチを設定して、遺構



第275図 内容確認調査区位置図

の確認に努めた。

調査は遺構確認面まで掘削作業を行った後、遺構の平面プランと遺物の出土状態を記録し、掘削土を埋め戻して現状保存の措置をとった。

トレンチ調査によって検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡と考えられるプランが12か所確認された。このうち出土した遺物から勝坂Ⅲ式期が1か所、加曾利 E I ~ EⅢ式期が11か所と判断した。また、併せて縄文時代後期の住居跡で、加曾利 B I 式期と考えられるプランも5か所検出された。

なお、調査にあたっては便宜的に A ~ S の記号を付したトレンチを設定した。

#### A ~ C・R トレンチ (第276図)

A ~ C トレンチは集落範囲の北西端に設定したトレンチである。A トレンチでは住居跡と想定される遺構のプラン3か所と、土坑、ピットが数基確認された。A 区の北西端で確認したプランは台地の斜面に位置していた。一部についてサブトレンチを設定して掘削を行ったところ、床面と炉跡、柱穴を検出した。床面の地山は南東隅においてはソフトロームであったが、北西部分については同レベルで沖積土であった。この住居跡は、集落範囲の北西端部である可能性が高い。出土した遺物から帰属時期は加曾利 E I 式期と考えられる。

B・C トレンチでは、住居跡と想定されるプランを合わせて6か所確認し、いずれも加曾利 E I 式期に比定される。

R トレンチは環状集落の北側を対象とした。調査は、集落から水場へアプローチする遺構を確認するため、台地上から第4次調査区へ指向して設定した。調査の結果、住居跡と想定されるプランと土器廃棄土坑、時期不明の道路状遺構を確認した。

住居跡と思われるプランでは加曾利 E I 式新段階から加曾利 E II 式古段階の土器が主体的に出土しており、ここが環状集落の北端であると判断される。また、この住居跡と切り合い関係にある土坑では連弧文土器を伴う加曾利 E II 式新段階の土器が主体的に出土している。

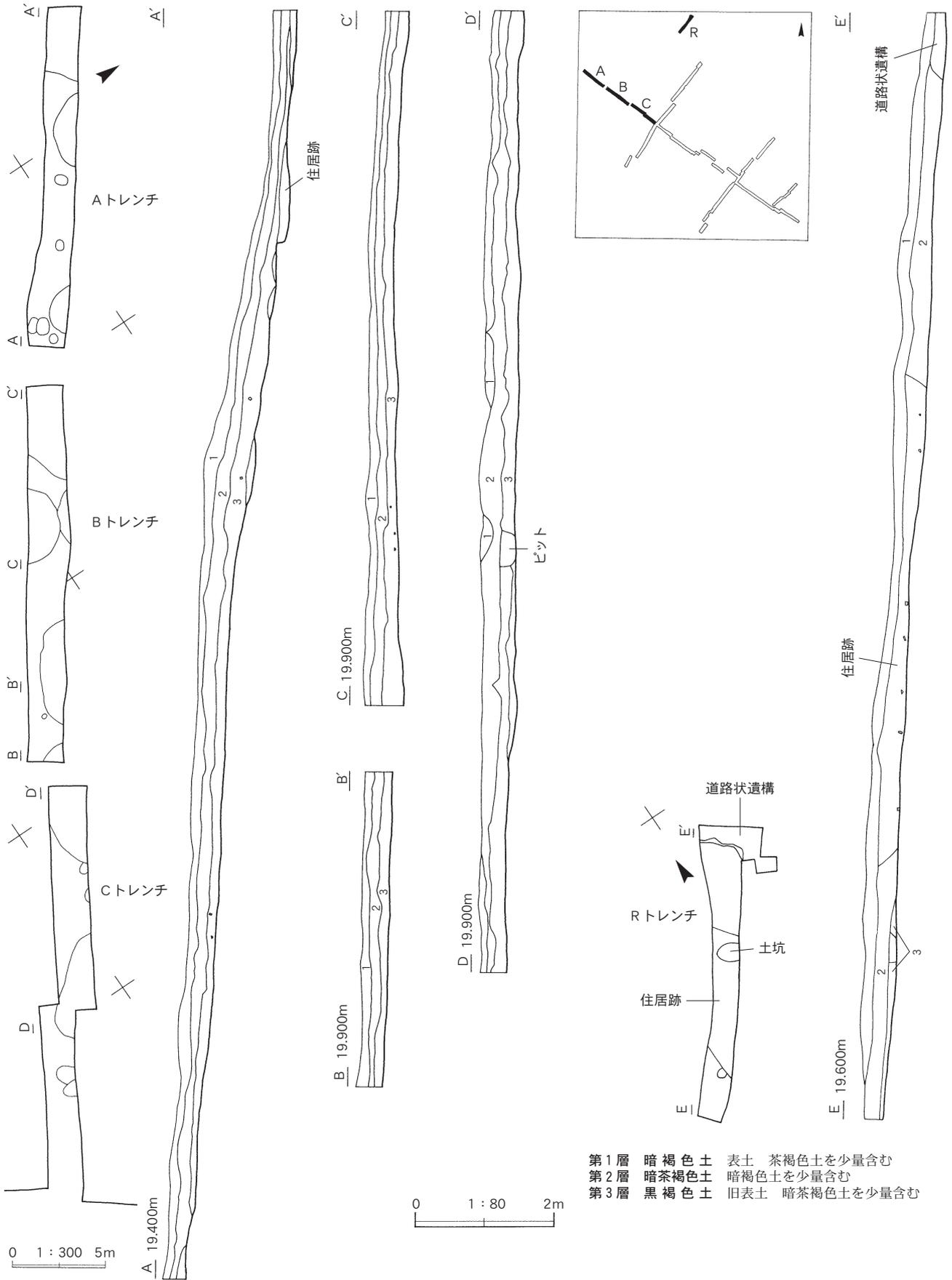
道路状遺構はトレンチの北東端で検出された。掘り込みはなく、暗茶褐色土を踏み固めて硬化面となっていた。硬化面には小礫が包含される。遺物は硬化面の直上から縄文時代中期後半の土器片が検出されたが、時期決定は困難であった。

#### A ~ C トレンチ出土土器 (第277図)

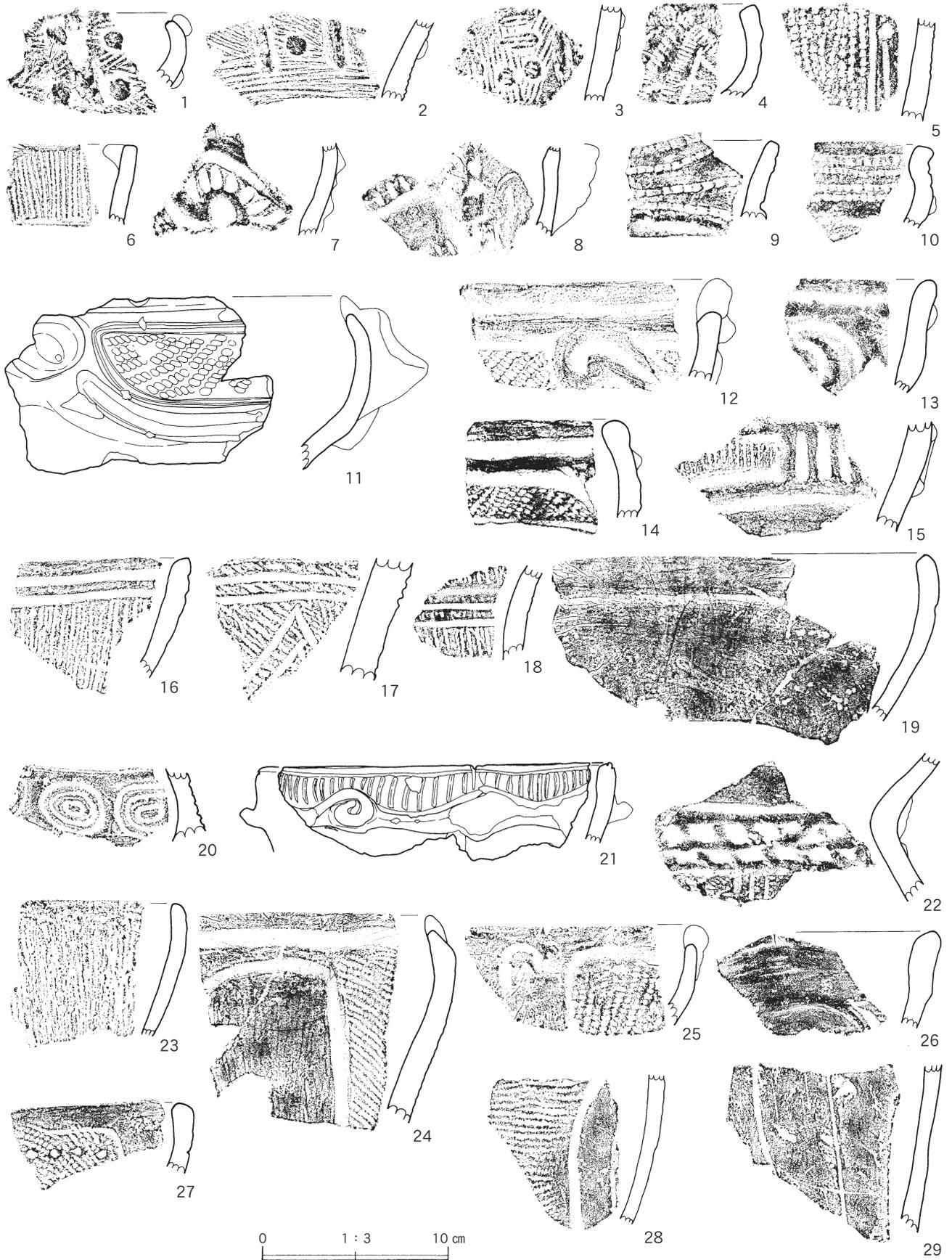
1 ~ 3 は諸磯 c 式土器である。いずれも集合沈線を地文として、円形あるいは楕円形の貼付文を施す。4 は勝坂Ⅱ式の口縁部片である。隆帯に沿った爪形文により構成される重三角区画文の一部であろう。5 は縦位の区画文が沈線により構成され、内部は三角押文を充填する。6 は勝坂Ⅲ式に比定される。口唇部が内側に屈曲して庇状となり、直下は縦位の集合沈線を施す。7 は平行する隆帯により描かれる渦巻文内に列点を施す。

8 ~ 10 は阿玉台式土器である。8 は阿玉台 I b 式と思われ、波状口縁の波頂部から隆帯が垂下する。口唇直下の肥厚部には刻みを施す。9 は波状口縁部である。口唇直下と隆帯に沿って角押文を描く。阿玉台 I b 式である。10 は口縁の肥厚部と隆帯に沿って2列の角押文が描かれる。

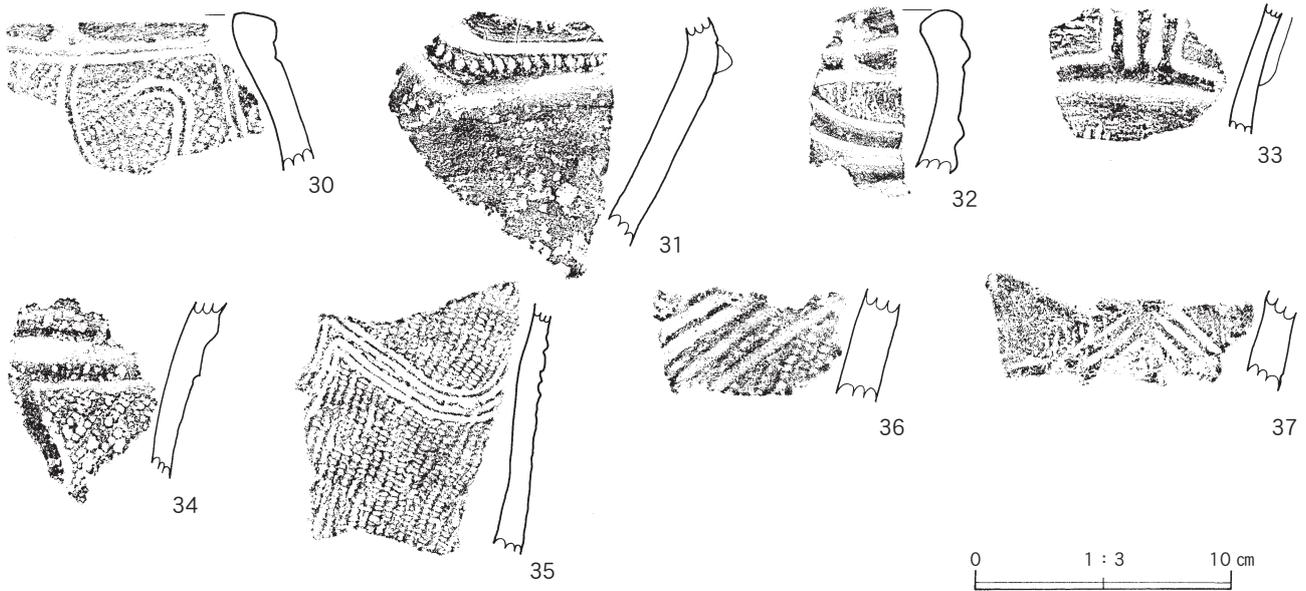
11 ~ 15 は加曾利 E I 式の深鉢形土器である。11 は繋ぎ弧文の結節部が突起状となり、円形の窪みを貼付する。12 は2本隆帯の端部が太く弧状を呈する横 S 字状文を描く。13 は隆帯による渦巻文である。14 は区画文内に横位の沈線を施し上下に分離する。15 は頸部付近の破片である。口縁部文様帯の隆帯を縦位の短沈線で



第276図 I区A～C・Rトレンチ



第277図 I区A～Cトレンチ出土遺物



第278図 I区Rトレンチ出土遺物

繋ぐ。

16～18は連弧文土器である。16は口縁部片でやや内湾する器形である。口唇部直下は平行する沈線が廻る。17、18は胴部を上下に区画する横位の沈線を施す。17は直線的なモチーフを描く。

19、20は浅鉢形土器である。19は口縁部直下に浅い沈線が廻る。加曾利EⅢ式であろう。20は勝坂式土器である。口縁部の同心円のモチーフを横位に連続させる。

21、22は曾利系の土器である。21は口唇部直下に縦位の沈線を充填させた弧状の沈線文を連続させ、直下に渦巻文を伴う隆帯を外側へ突出させる。22は深鉢形土器の頸部片で隆帯により格子目文を描く。

23～25は加曾利EⅢ式の土器である。23は縦位の条線による地文のみを施す。24は口唇部直下に横位の沈線を施し、胴部は内部が磨り消された逆U字状文が描かれる。25は逆U字状文の外部を磨り消し、蕨手文を描く。

26は加曾利EⅣ式の土器で波状口縁部である。逆U字状の微隆帯が口縁部にやや貫入する。

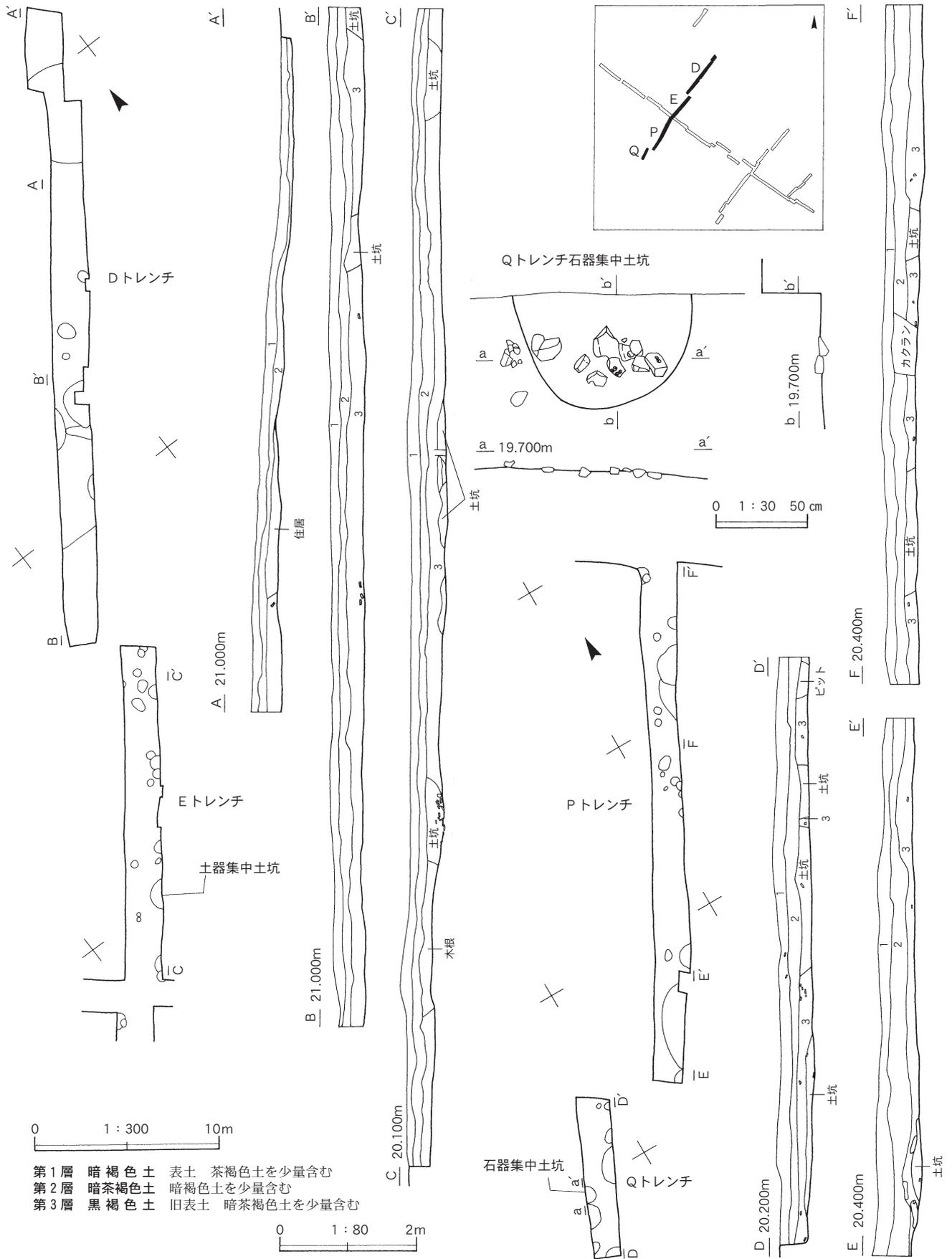
27～29は称名寺式の土器である。27は縄文帯によるモチーフに列点を加えられる。28は縦位のモチーフが磨り消しの手法により描いている。これらは称名寺I式である。29は称名寺Ⅱ式の土器で、平行する縦位の沈線による文様が描かれる。

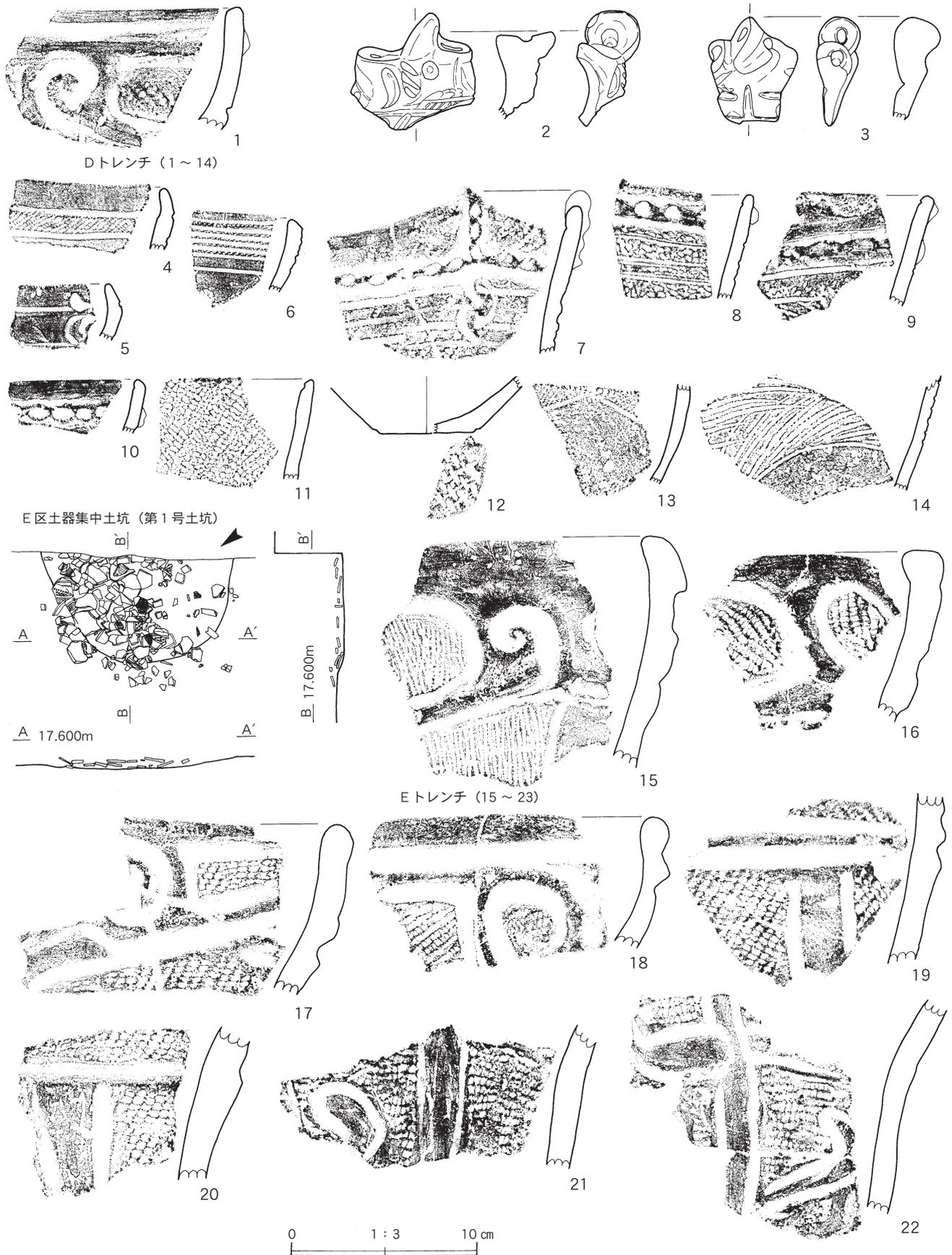
#### Rトレンチ出土土器 (第278図)

30～37はRトレンチ出土の土器である。30は大木式系の土器である。口唇部が外側に肥厚し、直下に半裁竹管による沈線が沿い、そこから蕨手状の懸垂文を描く。31は勝坂Ⅲ式の楕円形区画文で、隆帯に刻みを施す。32～34は加曾利EⅠ式の土器である。32は口縁部片で、弧状の隆帯による区画文を描く。33は頸部片で方形の区画文が縦位の隆帯を挟んで対向する。34は胴部片で蛇行隆帯による懸垂文を施す。35～37は連弧文土器の胴部片である。35の弧線文は半裁竹管により描いている。

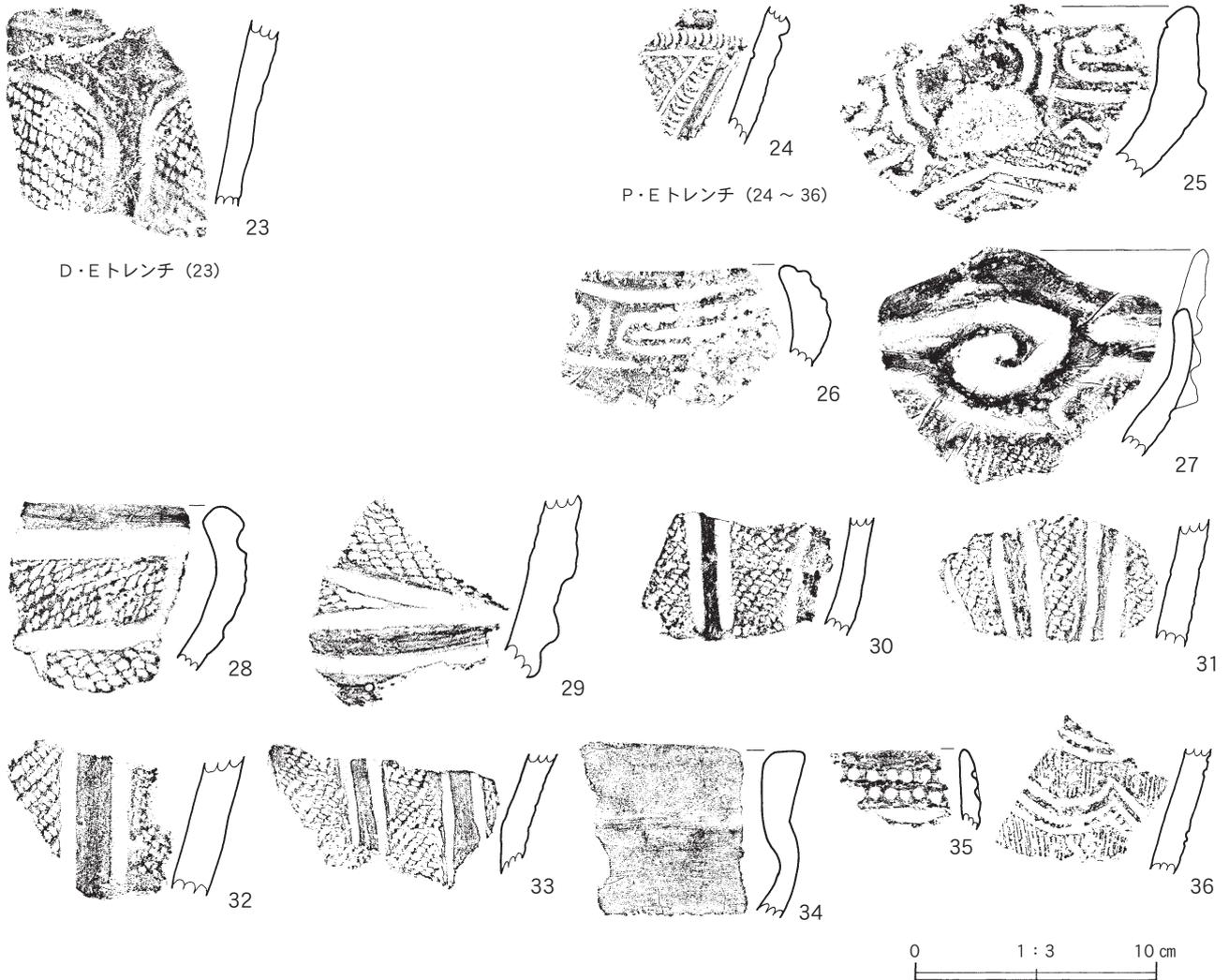
#### D・E・P・Qトレンチ (第279図)

D・Eトレンチは集落範囲の北東端の確認のために設定した。Dトレンチでは、出土した遺物から加曾利EⅡ式期に帰属すると考えられる住居跡のプランが1か所と、南西端で加曾利BⅠ式期に属すると想定され





第280図 I区D・Eトレンチ出土土器・土器集中土坑



第281図 I区E・P・Qトレンチ出土土器

る住居跡のプランを1か所確認した。

Eトレンチではピットと土坑が検出されている。このうち、土器廃棄土坑と考えられる遺構を検出し、加曾利EⅢ式の土器破片が多量に出土した。

P・Qトレンチは集落範囲の南西端を確認するために設定したトレンチである。Pトレンチでは、住居跡と考えられる遺構の平面プランを2か所確認した。このうち南西側のプランでは、覆土中に焼土や炭化物の分布が顕著にみられ、覆土の堆積過程における何らかの燃焼行為が行われた痕跡が確認された。帰属時期は加曾利EⅡ式期である。また、もう1か所はトレンチの北東部で検出され、加曾利EⅢ式期に比定される。さらにPトレンチの南西端で、石器集中遺構が検出されている。器種は多孔石や磨石などが出土している。

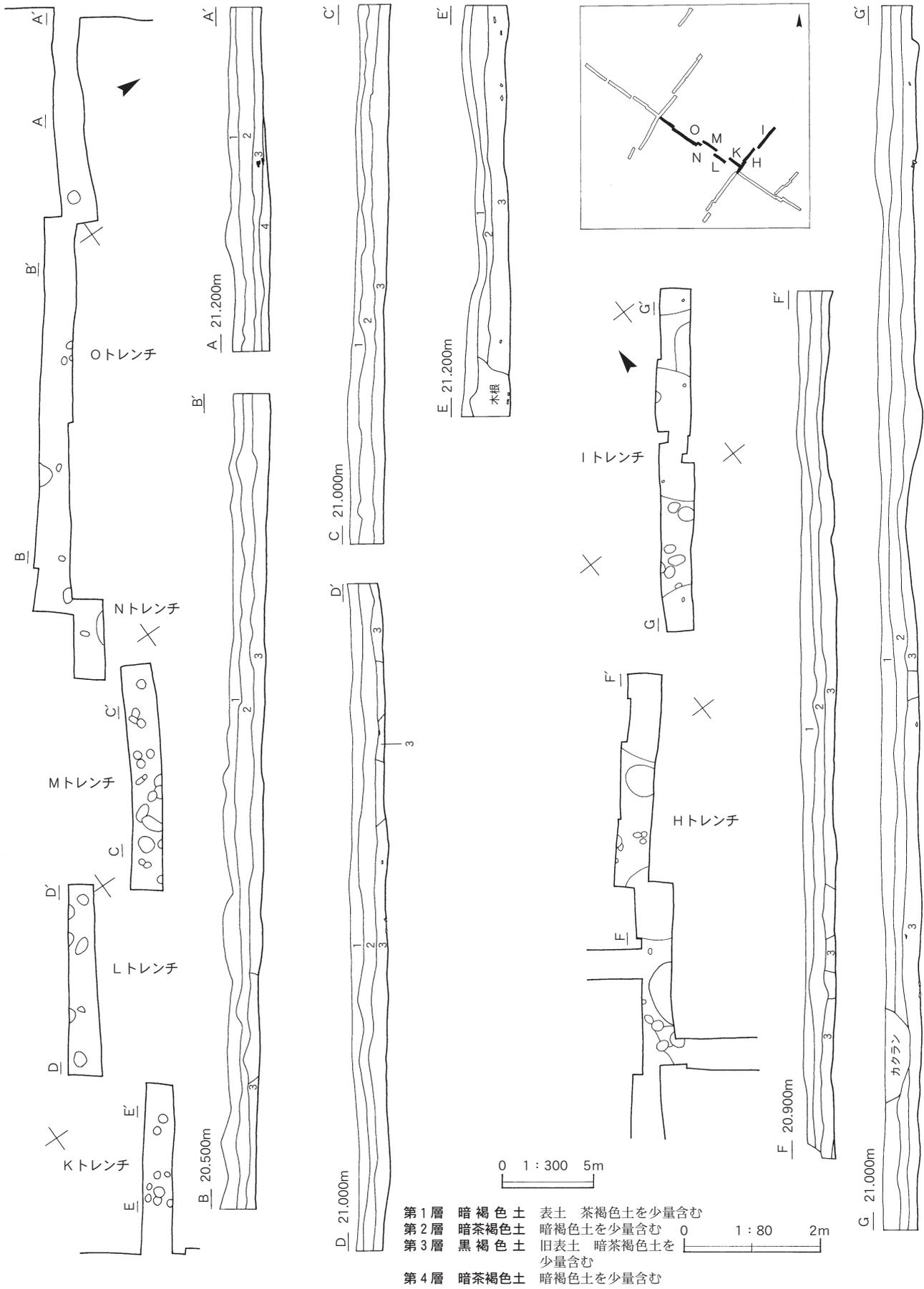
Qトレンチでは勝坂Ⅲ式期から加曾利EⅢ式期の土器を伴う土坑が数基確認されている。

#### D・Eトレンチ出土土器 (第280・281図)

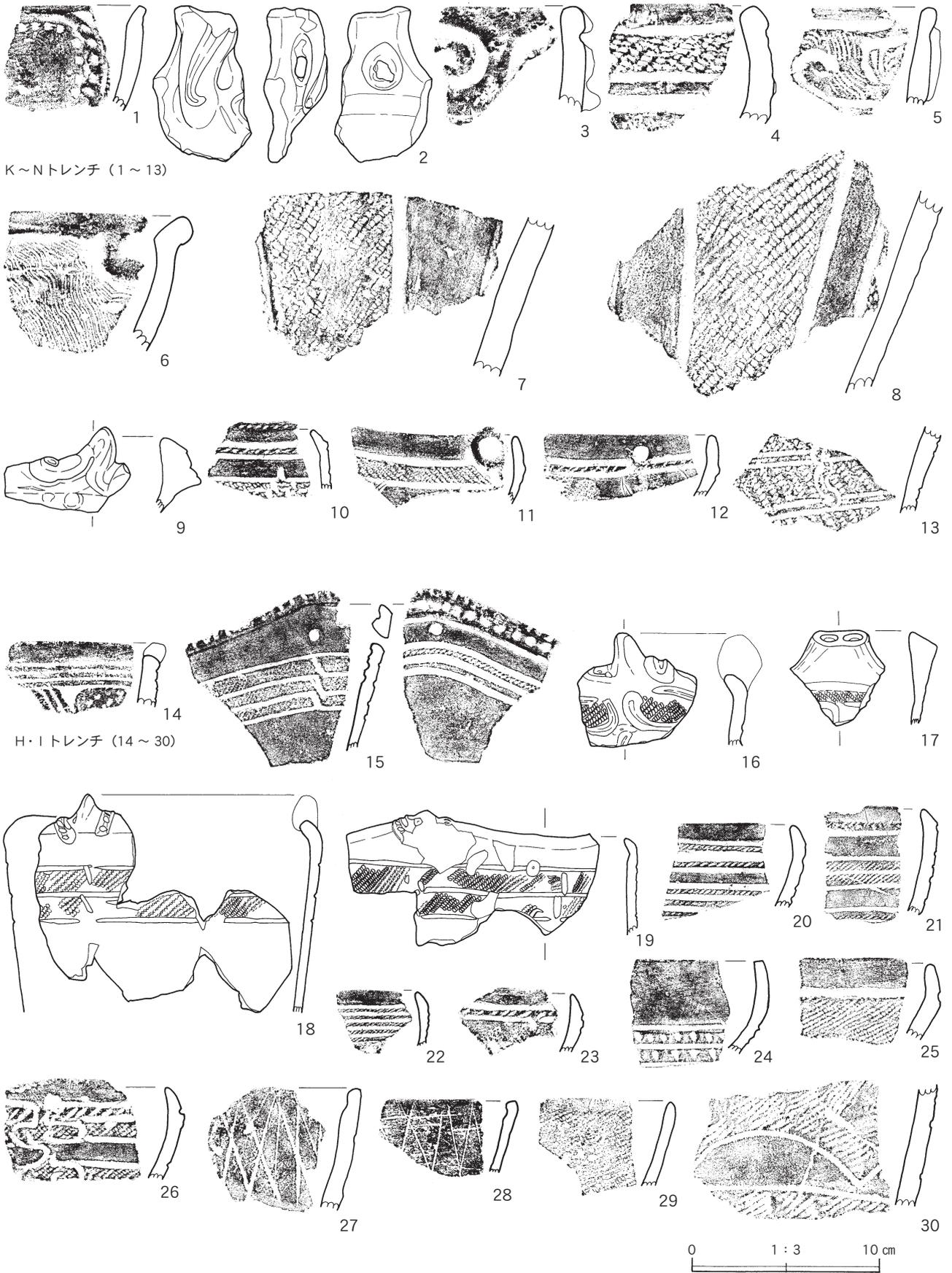
1は加曾利EⅡ式の深鉢形土器である。渦巻文から派生した隆帯が楕円形の区画文を描出する。

2、3は加曾利BⅠ式の突起部である。2は左向きの円形突起と上向きの円孔を施した突起の2か所が入組状である。3も同様に左向きの円形突起である。

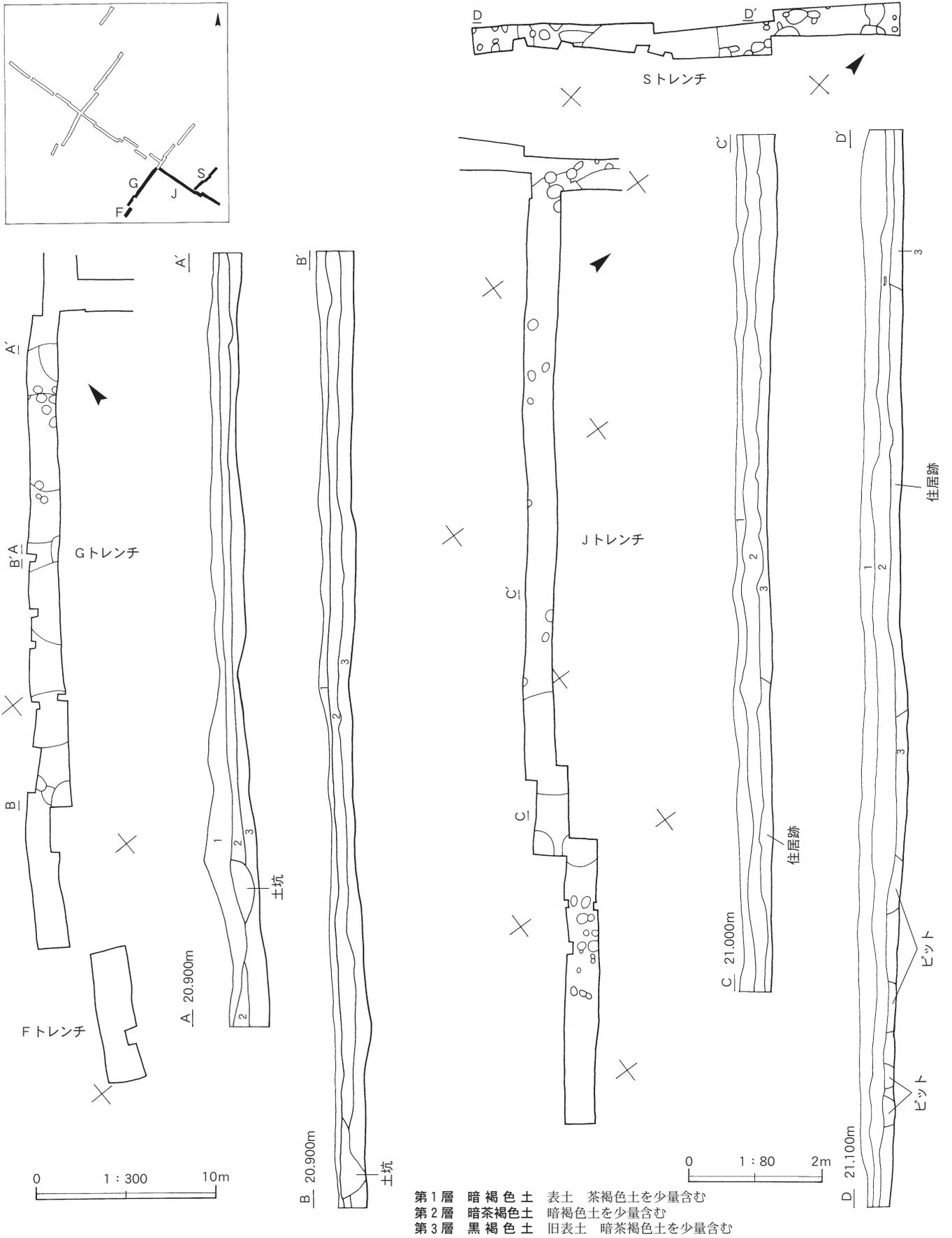
4～6は深鉢形土器の口縁部片である。いずれも精製土器で、4は口縁部に横位の縄文帯が廻る。5は対



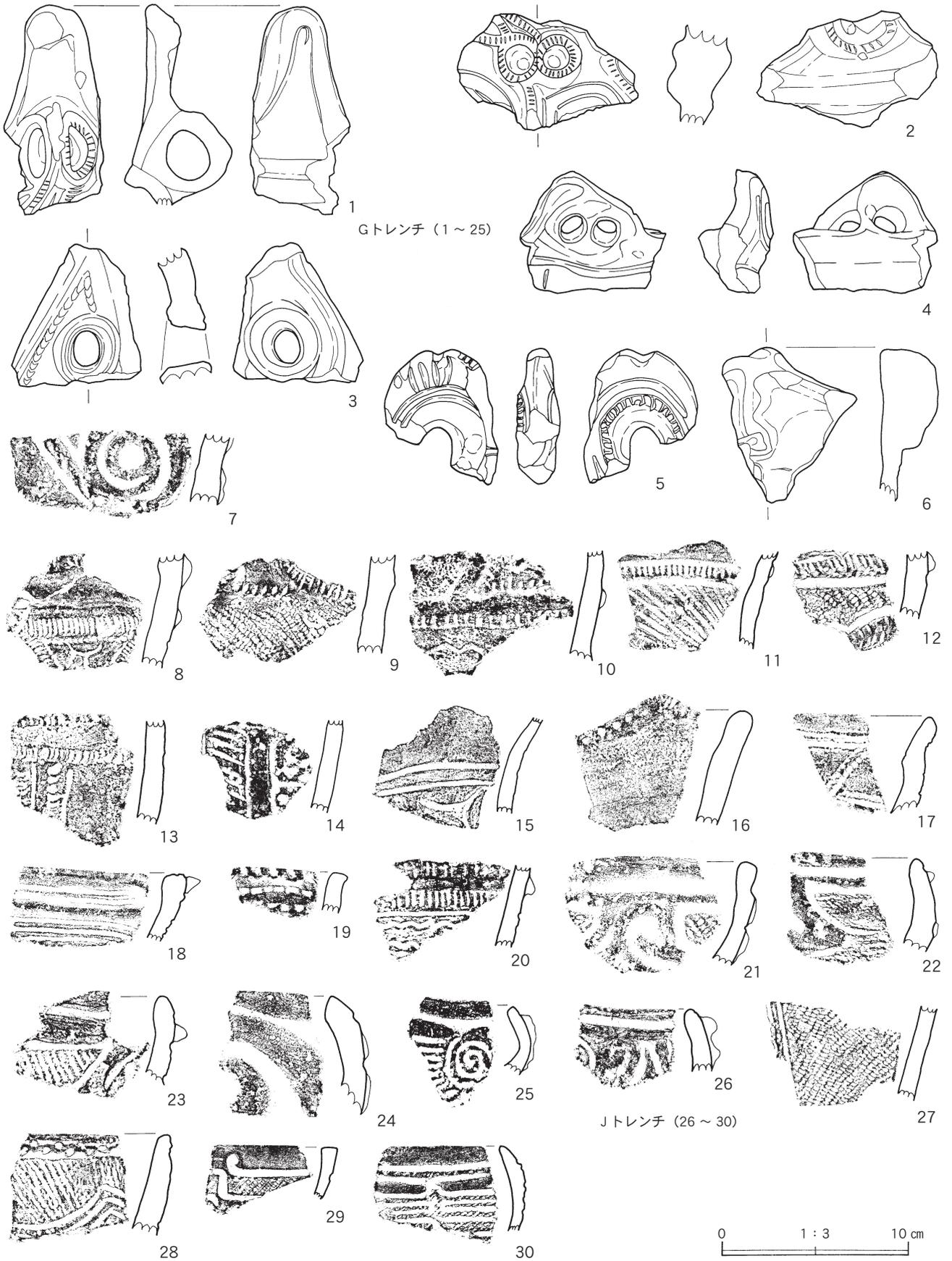
第282図 I区K～O・H・Iトレンチ



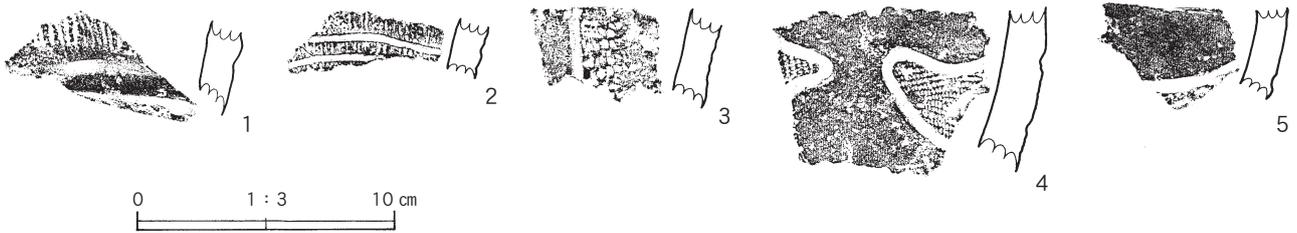
第283図 I区K~O・H・Iトレンチ出土遺物



第284図 I区F・G・J・Sトレンチ



第285図 I区G・Jトレンチ出土遺物



第286図 I区Sトレンチ出土遺物

向する弧線文が描かれる。6は刻みもつ沈線を複列施文する。いずれも加曾利BI式である。

7～10は加曾利BI式の紐線文土器である。7は波状口縁である。波頂部から紐線文が垂下し、横位の紐線文と結節する。胴部は縄文帯を繫いで対向する沈線が垂下する。8～10は口縁部に紐線文を廻らす。

11はLRの単節縄文を地文とする粗製土器である。

12は浅鉢形土器の底部片で、底面に網代痕が遺存する。

13、14は加曾利BII式の土器である。13は沈線により弧線文を描く。14は深鉢形土器の胴部に羽状沈線文を施す。

15～23は加曾利EIII式の土器である。いずれもやや内湾し、口唇端部が肥厚する器形である。口縁部文様帯は渦巻文あるいは円形の区画文を挟んで、矩形の区画文が対向して展開する。15は地文に撚糸文を施す。また、15、17は胴部と口縁部を区画する隆帯が波状を呈する。16、18は円形の区画文内に縄文を施す。

19、20は胴部片で、磨り消しによる懸垂文が頸部から垂下する。21は懸垂文から派生した渦巻文が沈線により描かれる。22は懸垂文から横位に沈線文が派生し内部が磨り消される。

23は連続する逆U字状文である。文様帯外部が磨り消されている。

#### P・Qトレンチ出土土器（第281図）

24は勝坂III式の土器である。区画文内に爪形文と縄文を充填する。25、26は沈線により口縁部の文様帯を構成する。25は平行する弧状の沈線が対向し、これを挟んで楕円形の区画文が対峙する。26は縦位の沈線を起点として区画文が対向する。

27～29は加曾利EIII式の深鉢形土器で、いずれも口縁部片である。27は波状口縁で、波頂部直下に渦巻文を配して横位に隆帯を派生する。28は幅の広い隆帯により区画文を描く。29は斜行する隆帯によって胴部を区画する。

30～33は磨り消しによる懸垂文を描いた胴部片である。

34は無文の浅鉢形土器である。口縁部が矩形に肥厚するがやや幅が広い。

35、36は連弧文土器である。35は口唇直下に2列の刺突文を横位に施す。36は胴部片で3本の平行する沈線が連弧文を描く。

#### K～O・H・Iトレンチ（第282図）

これらのトレンチは環状集落の中央広場の様相を明らかにするために設定した。調査区からは住居跡状のプランは検出されておらず、K・L・M・Nトレンチにおいてはピットの集中がみられ、Oトレンチでは遺構がほとんど検出されなかった。

遺物は阿玉台式、加曾利EI式・EIII式、加曾利BI式の土器片が出土している。

H・Iトレンチは、北東部の集落範囲を確認するために設定した。ここでは加曾利BI式期と考えられる

住居跡状の平面プランを合計5か所検出した。

また、調査区内に分布する土坑からは、覆土中に加曾利 E I 式～ E II 式の土器を包含する遺構が多く確認されており。中期の遺構分布範囲に後期の住居跡群が重なる様子がうかがえた。

#### K～O トレンチ出土土器 (第283図)

1は阿玉台 I b 式の土器で、口唇部直下から刺突のある隆帯が垂下し、区画文を構成する。隆帯に沿って角押文を施す。2は加曾利 E I 式で、縦位の橋状突起である。頂部は渦巻状に窪み、沈線となって突起上を垂下する。裏面からの貫通孔を有する。

3、4は加曾利 E II 式の土器で口縁部片である。3は隆帯による渦巻文を描く。4は方形の区画文である。

5、6は加曾利 E III 式の土器である。5は深鉢形土器の渦巻文と区画文を描く。隆帯上には蛇行する条線を施す。6は口唇部が肥厚し、隆帯が弧状に垂下する。地文は蛇行する条線を全面に施す。

7、8は深鉢形土器の胴部片で、縄文帯と無文帯が交互に描かれる。

9～13は加曾利 B I 式の土器である。9は深鉢形土器の口縁部に貼付される円形の突起で、波状口縁の頂部に沿って隆帯が派生して円孔を施す。10は縄文帯を縦位に繋ぐ短沈線を施す。11は円形の貼付文が口唇部上に突出する。12は口唇部直下に円孔を施す。13は粗製土器で縦位のコンパス文が縄文帯を繋ぐ。

#### H・I トレンチ出土土器 (第283図)

14は十三菩提式土器の口縁部片である。細隆起線文と彫刻文を組み合わせた三角文が描かれる。

15～30は加曾利 B I 式の土器である。15は波状口縁の深鉢形土器である。表面は3条の縄文帯が縦位の沈線により繋がれている。裏面は口唇直下に刺突列が廻り、沈線帯が波状に配される。補修孔が外から内へ開けられる。16、17は突起部で、16は円形の突起を貼付する。直下は対向する縄文帯を配する。17は山形状の突起で、端部には円孔が2か所施される。18、19は同一個体で、口縁は緩い波状を呈する。3単位の突起が波頂部に施され、器形は直線的な立ち上がりである。胴部文様帯は平行する2条の縄文帯が廻り、縦位の短沈線で繋がれる。19は外から開けられた補修孔が未貫通である。20、21は深鉢形土器である。20は刻みが施された沈線帯が廻る。21は無文帯、縄文帯、沈線帯が平行する。22～26は浅鉢形土器である。いずれも口唇端部は内湾しながら立ち上がる。24は平行する沈線間に列点が充填される。25は沈線の直下に幅広の縄文帯を施す。26は縄文帯を縦位の沈線がクランク状に繋いでいる。27～29は粗製の土器である。27、28は浅い沈線による格子目文を描く。29は無節 r の地文を施す。

30は加曾利 B II 式の粗製土器で胴部に弧線文が描かれる。

#### F・G・J・S トレンチ (第284図)

F・G トレンチは集落範囲の南東端を確認するために設定した。このうち F トレンチでは明瞭な遺構は確認できなかった。G トレンチでは住居跡と想定される遺構平面プランが4か所確認された。いずれのプランでも遺物の出土は極めて豊富であり、遺構・遺物の遺存状態が良好であることがうかがえた。出土した遺物は勝坂 III 式の土器を主体とし、加曾利 E I 式期の遺物も含まれる。住居状の遺構は勝坂 III 式期と加曾利 E I 式期に比定される。

J トレンチは集落範囲の南東端を確認するために設置された。このエリアからは住居跡と思われる円形のプランを1か所検出した。住居跡の覆土中には加曾利 E II 式の遺物が主体的に検出され、当該期の帰属であると考えられる。この他に、トレンチからは加曾利 B I 式土器が一定量出土しており、付近に縄文後期の遺

構の存在が想定される。

Sトレンチは台地上に所在する中期環状集落の南西部の状況を明らかにするために設定した。調査の結果、住居跡と考えられるプラン及び土坑・ピットが検出された。遺構のプランからは称名寺Ⅱ式の遺物も出土したが、主体は加曾利EⅡ式であり、遺構の帰属は当該期であると考えられる。

#### F・Gトレンチ出土土器（第285図）

1～6は勝坂Ⅲ式土器の突起部である。1は山形状を呈する。橋状の隆帯が波頂部から垂下していたと思われる。左右の貫通孔を有し、周縁は粘土紐の貼付により肥厚する。2も山形状の突起で頂部を欠する。貫通しない眼鏡状の貼付文が施され、刻みを有する隆帯が派生する。3は表裏の貫通孔を有する山形状の突起である。貫通孔の周辺は粘土紐の隆帯により表裏共に肥厚する。4は非対称形の山形状の突起である。二つの貫通孔を有する。5は半円形の突起である。端部に押圧が加えられる。貫通孔の裏面周縁は肥厚部に刻みが加えられる。6は山形状の突起で、波頂部から太い隆帯が垂下し、途中で変化して蛇行隆帯となる。

7～15は勝坂Ⅲ式の資料である。7は渦巻文から斜状に派生した隆帯が区画文を構成すると想定される。8は無文帯直下の区画文で、爪形文が隆帯に沿い三叉文を充填する。9、10は楕円形横帯文が描かれると考える。11、12は刻みを施された隆帯で区画文が描かれる。11は内部が集合沈線、12は縄文が施される。13、14は円筒形を呈する深鉢形土器である。13は爪形文が文様帯を区画する。14は沈線文である。15は頸部に無文帯を有する土器である。横位の平行沈線直下に三叉文が描かれる。

16～20は阿玉台式土器である。16は波状口縁で、口唇部に浅い刻みをもつ。阿玉台Ib式である。17～19は阿玉台Ⅱ式の土器である。いずれも平口縁である。17は隆帯に沿って2列の有節沈線が施され、内部は斜状に描く。18は隆帯による区画内に平行する有節沈線文を描く。19は角押文が施され、口唇部は刻みを有する。20はⅢ式の土器である。隆帯に沿って爪形文が施される。

21～25は加曾利EⅠ式の土器である。21、22は隆帯による扁平な繋ぎ弧文が描かれる。23は波状口縁である。24は幅の広い隆帯による渦巻文が描かれる。25は密な沈線による渦巻文が描かれる。

#### Jトレンチ出土土器（第285図）

26、27は加曾利EⅡ式の土器である。26は渦巻文と区画文、27は平行する沈線による懸垂文である。

28は連弧文土器である。口唇直下には横位の交互刺突文が施される。

29、30は加曾利BⅠ式の土器である。29は縄文帯を画する沈線の一端が肥厚し、口縁部無文帯で円孔となる。30は刻みを有する沈線帯が縦位の沈線で繋がる。

#### Sトレンチ出土土器（第286図）

1は加曾利EⅠ式の頸部片である。胴部の地文は撚糸文が施される。2は連弧文土器の胴部の括れ部で、平行沈線が横位に廻る。3は加曾利EⅠ式の胴部懸垂文である。4、5は称名寺Ⅰ式の土器である。4はJ字状のモチーフが縄文帯により描かれる。

### 第3節 II区の調査

調査は遺跡の北東側を対象に実施し、縄文時代後期前葉の集落の規模、範囲、構造などを明らかにすることが目的である。

調査は幅2mのトレンチを台地の崖線と平行する1本と、これに直行する2本のトレンチを設定した。また、集落の東限を確認するため、トレンチを別途2本設定した。

遺構確認面までの深度は約50cmで、人力による遺構確認を行った後、平面プランと遺物の出土状態の確認と記録を行った。調査後は掘削土を埋め戻し、現状保存の措置をとった。

遺構は、堀之内Ⅰ・Ⅱ式期を主体とする住居跡と思われるプランが17か所検出された。

なお、調査にあたっては便宜的にa～iの記号を付したトレンチを設定した。

#### a～c トレンチ (第287図)

a～c トレンチは、弧状を呈する台地上の集落展開を確認する目的で設定した。調査区は全体に根の攪乱が顕著であったが、出土した遺物から堀之内Ⅰ式期に比定される住居跡状のプランを合わせて5か所検出した。また、c トレンチにおいて阿玉台式期に比定される住居跡状のプランも1か所確認している。

#### a～c トレンチ出土土器 (第288図)

1は深鉢形土器である。口唇部に小突起が施される。突起下には縦位に4つの円孔が配され、最上部のみが貫通しない。口縁部は無文帯となり、平行する横位の沈線が廻る。突起下の円孔を起点として2本一組の弧線が対向する。懸垂文を描く。また、弧線文間は平行する沈線による懸垂文を配する。胴部は緩く内湾し、口縁部は直立する器形である。綱取Ⅱ式に比定される。

2～5は阿玉台式土器で、住居状のプランから出土した。2は無文の深鉢形土器で口唇部が外屈し、胎土に雲母粒子を多く含む。3は口唇部直下に2列の角押文を施す。4、5は隆帯沿いに爪形文を施す。4は区画内に角押文を充填する。

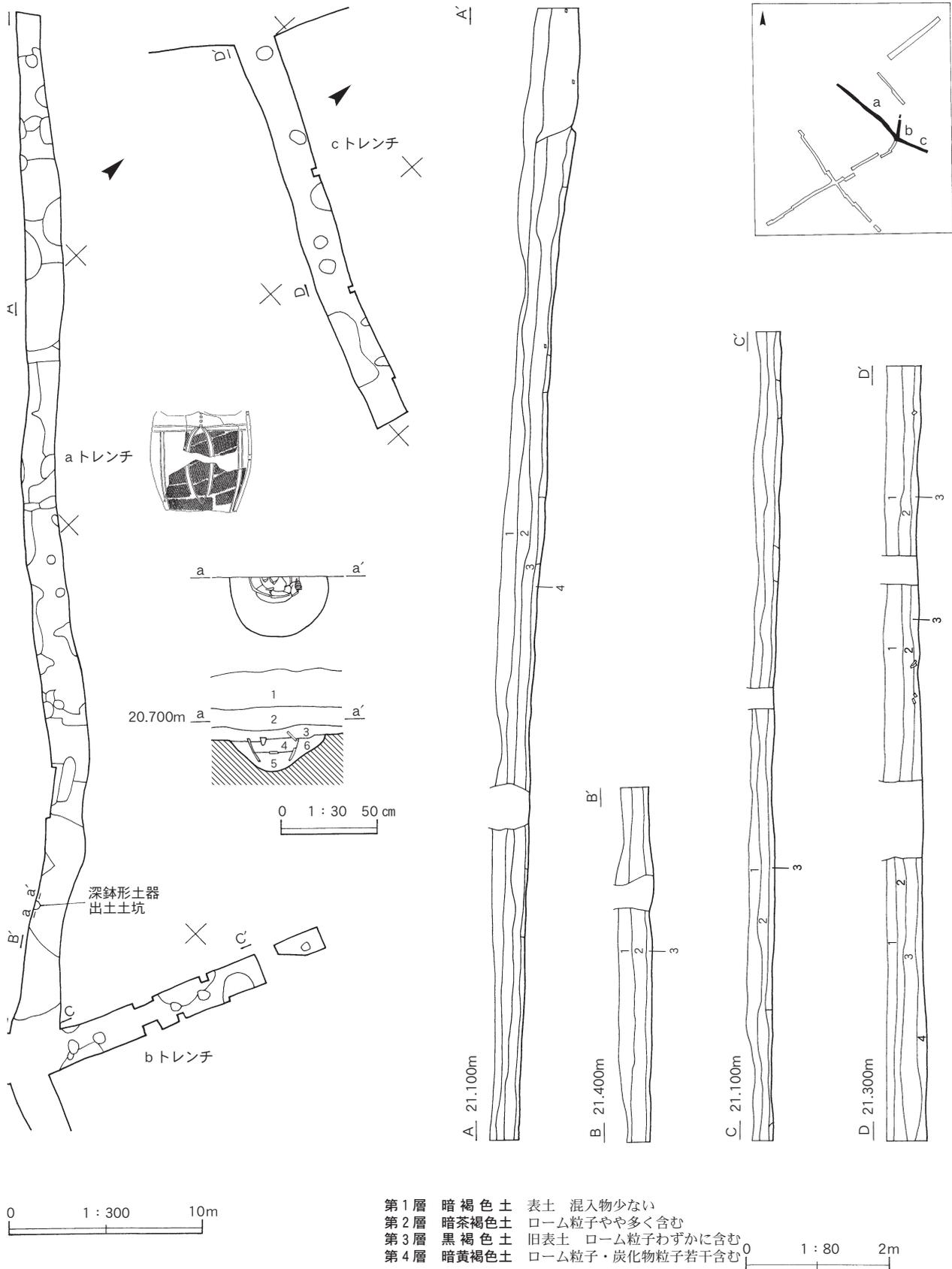
6～8は称名寺式土器である。6は突起部でC字状のモチーフが上下で対向する。7、8は称名寺Ⅱ式の土器で、2本の沈線間に列点を施す。

9～16は堀之内式土器である。9は波状口縁で、波頂部を起点に平行沈線による幾何学文を描く。10は粗製土器で緩い波状口縁である。小突起直下の刺突文を起点に沈線が横位に廻る。11、12は口唇部直下に刺突を伴う隆帯と8字隆帯を貼付する。13、14は深鉢形土器の幾何学文の一部で、13は充填縄文を施す。15は胴部片で格子目文を描く。16は注口土器の胴部片である。刻みのある隆帯により区画文を描き、内部に沈線文を充填する。

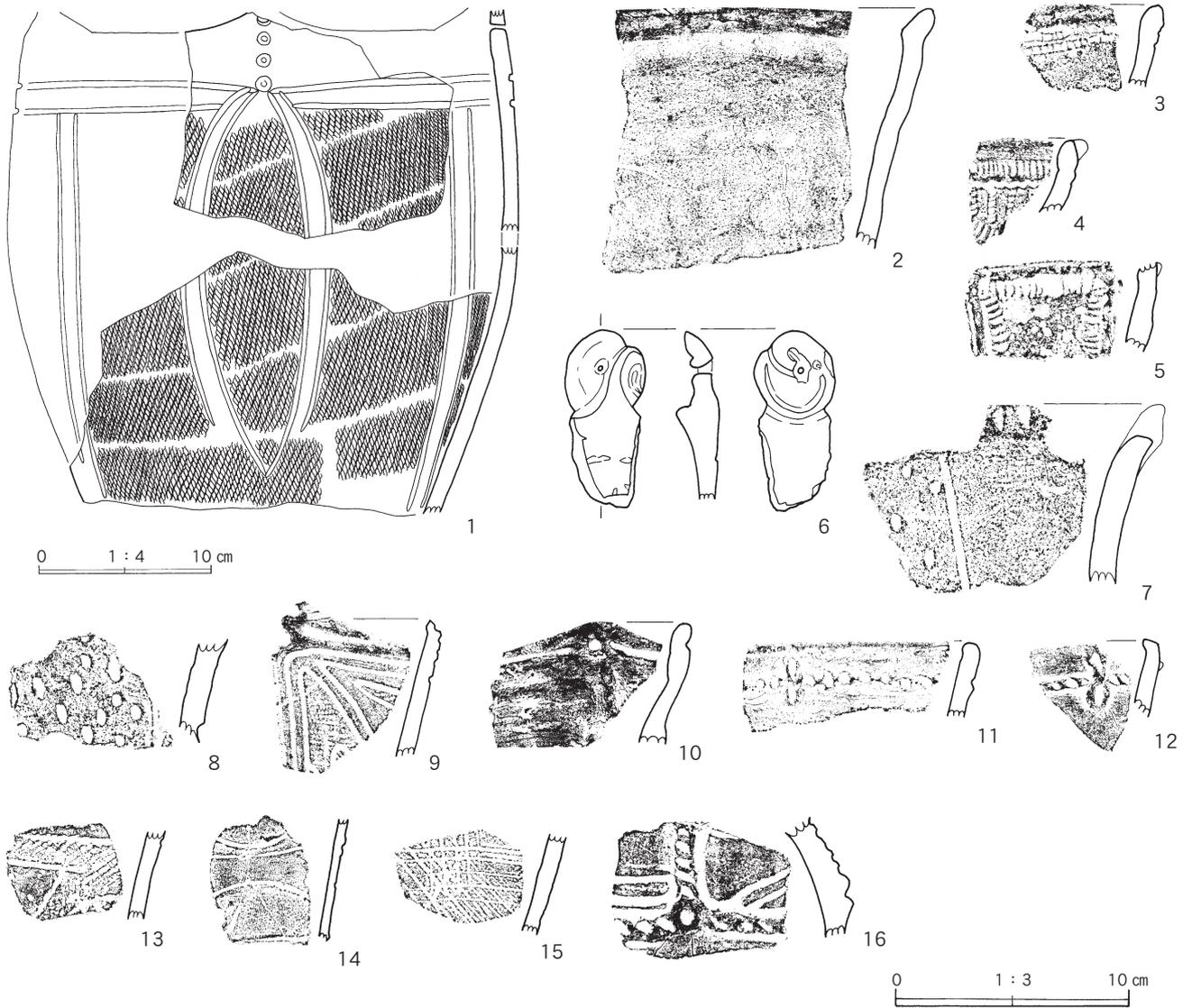
#### d～g トレンチ (第289図)

d～f トレンチは、北西の低地部から台地部に向かって浅い谷が入り込んだ谷頭付近に設定した。この谷の左岸にあたるf区では堀之内Ⅰ式期に比定される住居跡状のプランを1か所確認したが、全体として遺構は希薄であり、空地地としての様子がうかがえた。

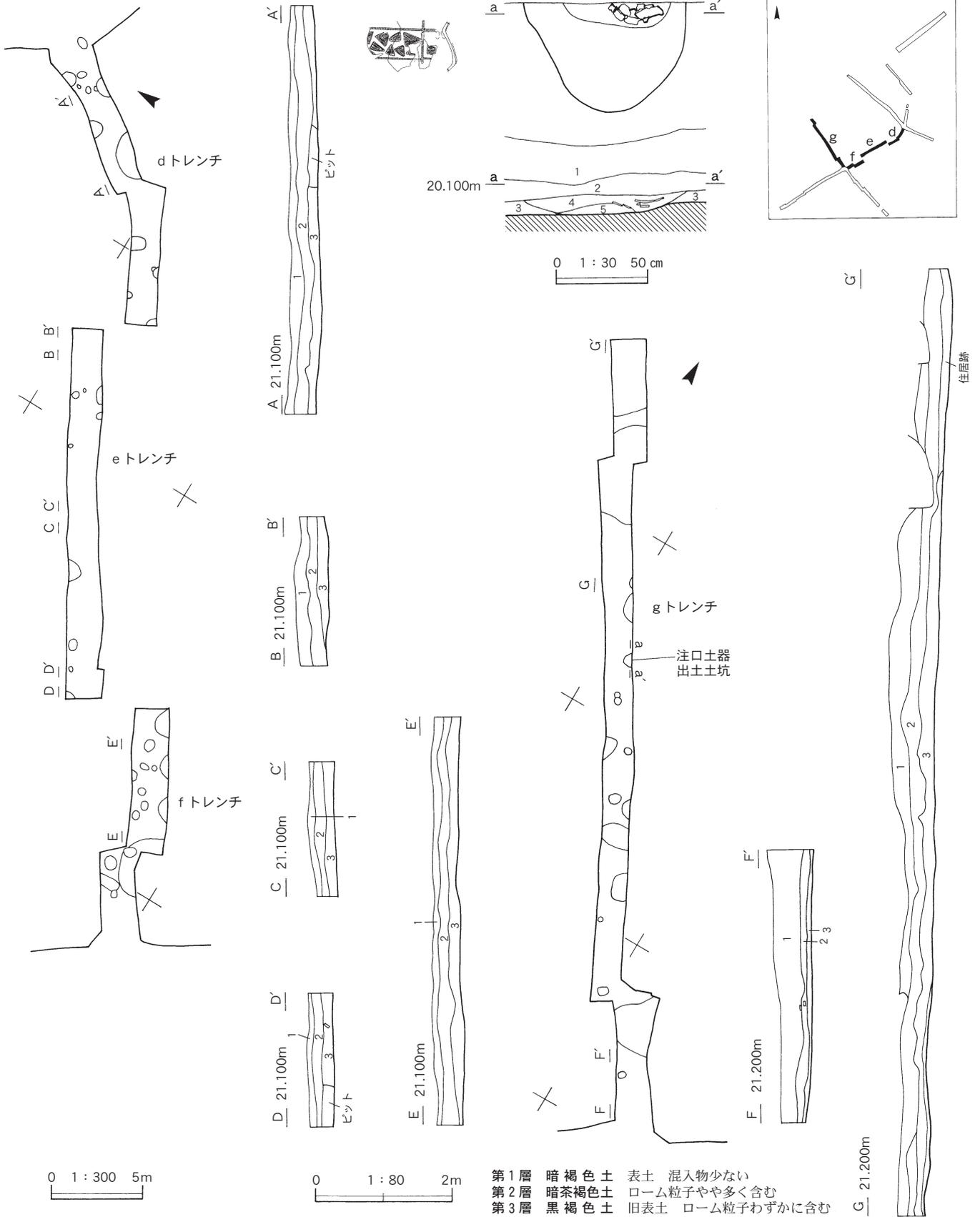
g トレンチは、低地部へ向かう斜面地を対象に、等高線に直行するように設定した。台地低位面の直上で堀之内Ⅱ式期と想定される住居跡状のプランを2か所確認し、台地の肩部付近で堀之内Ⅰ式期と考えられる住居跡状のプランを1か所確認した。



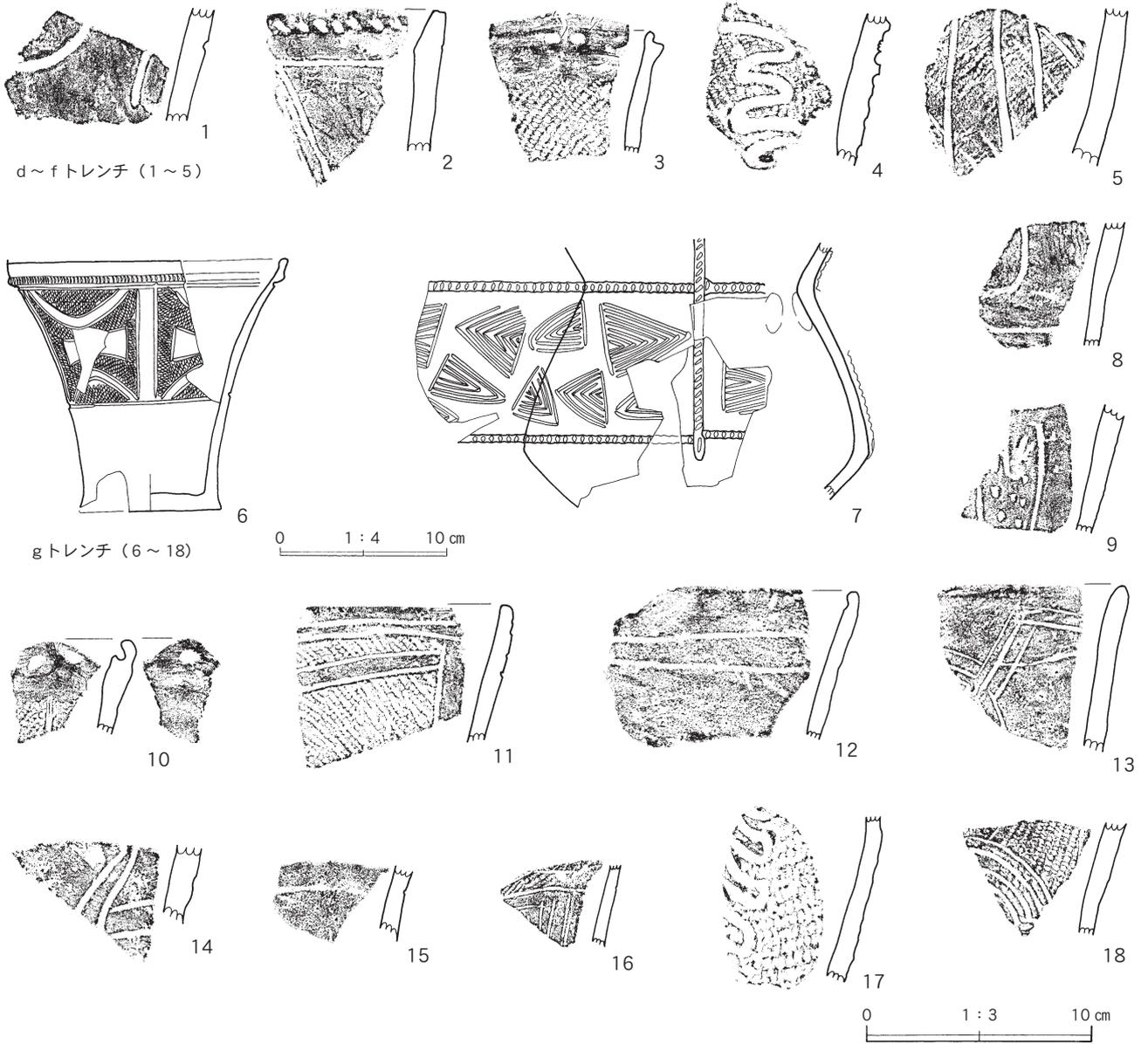
第287図 II区 a～c トレンチ・深鉢形土器出土土坑



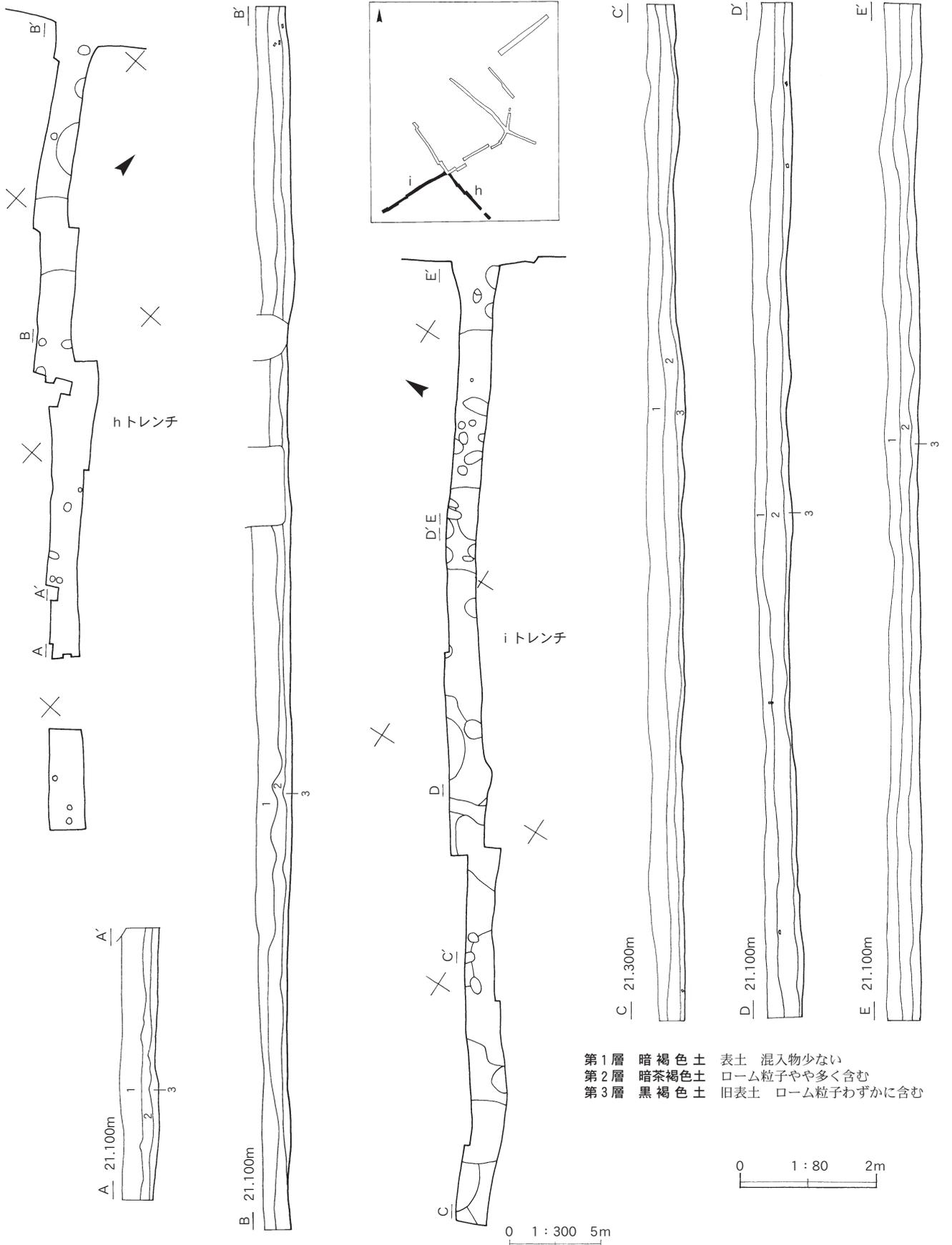
第288図 II区 a～c トレンチ出土遺物



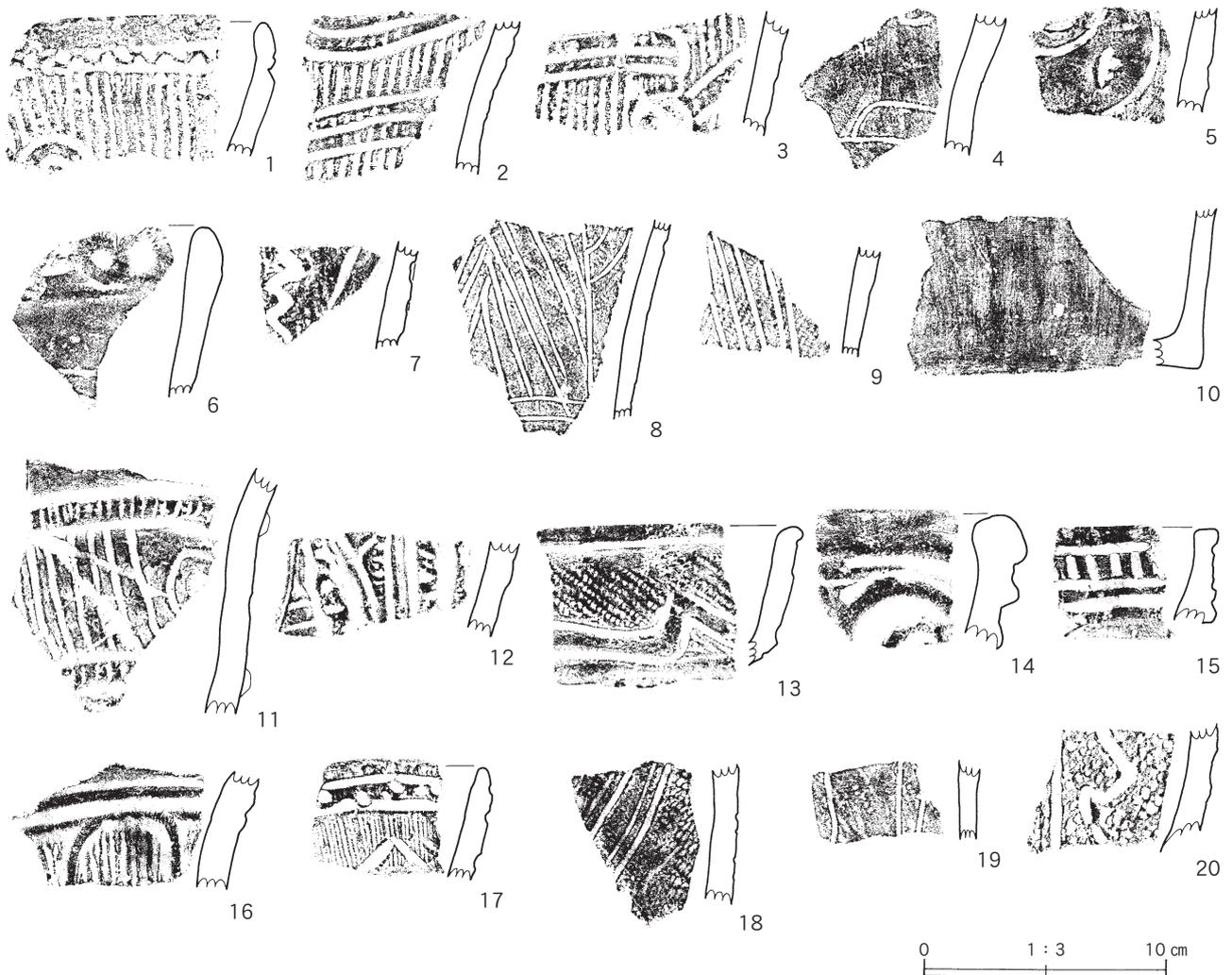
第289図 II区 d ~ g トレンチ・注口土器出土土坑



第290図 II区 d~gトレンチ出土遺物



第291図 II区h・iトレンチ



第292図 II区h・iトレンチ出土土器

なお、皿状の掘り込みをもつ土坑から堀之内II式期の注口土器が出土している。

d～fトレンチ出土土器（第290図）

1は称名寺式土器である。沈線による帯状のモチーフが描かれる。2～5は堀之内I式の土器である。2は口唇部に列点が施される。3は緩い波状口縁の波頂部直下に列点が加えられる。4は胴部片で、蕨手文を描く。5は縦位の沈線による懸垂文が描かれる。

gトレンチ出土土器（第290図）

6は深鉢形土器である。底部から緩く外反しながら立ち上がる朝顔形の器形である。口唇部直下には、刻みを施した隆帯が廻る。胴部の文様帯は、沈線による矩形の区画文内に対向する弧線文と矩形のモチーフを配し、RLの単節縄文を充填する文様帯の縄文は磨り消している。堀之内II式土器である。

7は浅い皿状の土坑から出土した注口土器の胴部である。底部は内湾しながら立ち上がり、胴部で屈曲してわずかに内湾し、頸部で外反する。頸部の屈曲部には刻みを有する隆帯が廻り、頸部から垂下する隆帯と交わり胴部へ続く。下部は刻みを施した隆帯に結節すると想定される。胴部の文様帯は櫛歯状工具による三

角文を連続して充填する。堀之内Ⅱ式 of 古段階であろう。

8、9は称名寺Ⅱ式土器である。ともにJ字状のモチーフが描かれるものと考えられる。9は沈線間に列点を施す。

10～18は堀之内式土器である。10は波頂部直下の表面に2点、裏面に1点の刺突を施す。11は沈線による矩形のモチーフを描く。12は平行沈線を横位に施し、内面の口唇部直下は沈線状である。13、14は平行沈線による幾何学文の一部と想定される。15、16は縄文帯が幾何学文を描く土器である。17は深鉢形土器の胴部片で蕨手文を描く。18は平行沈線による弧状のモチーフを施している。

#### h・iトレンチ（第291図）

hトレンチは後期集落の西側の範囲を確認するため、gトレンチを南東方向に延長した位置に設定した。調査区からは堀之内Ⅰ式期に比定される住居跡状のプランが1か所検出されたが、密度は薄く、さらに台地の南側へは集落が広がらないことが確認された。なお、調査区からは覆土中に称名寺式期の土器片を包含する土坑を検出している。

iトレンチは中期集落に東接する調査区で、後期集落と中期集落が重なる状況を確認するために設定した。遺構は勝坂式期に比定される住居跡状のプラン1か所、加曾利EⅠ式期に比定される住居跡状のプラン3か所、堀之内Ⅰ～Ⅱ式期に比定される住居跡状のプラン4か所、加曾利BⅠ式期に比定される住居跡状のプラン1か所が確認され、中期と後期の混在するエリアであることが明らかとなった。また、改めて中期環状集落の東端も明らかになった。

#### hトレンチ出土土器（第292図）

1～3は連弧文土器である。1は口唇部直下に交互刺突文が廻り、胴部には弧状の沈線文が描かれる。2は胴部の括れ部である。3は弧線文に付帯する沈線文を描く。

4、5は称名寺式の土器である。ともに沈線により帯状のモチーフを描く。5は沈線間に列点を充填する。

6～10は堀之内式土器である。6は口唇部直下に横位の8字隆帯を貼付する。7は胴部片で蕨手文が描かれる。8は胴部に懸垂文を集合沈線で描く。9は地文にLRの単節縄文を施す。10は深鉢形土器の底部片である。

#### iトレンチ出土土器（第292図）

11、12は勝坂Ⅲ式土器である。ともに刻みのある隆帯により区画文を描く。11は集合沈線を充填し、12は三叉文を施す。

13～15は加曾利EⅠ式の口縁部片である。横位の隆帯がクランク状に変化して横走する。14は隆帯により渦巻文を描く。15は区画文の内部を短沈線で充填する。16は胴部片で隆帯による懸垂文を描いている。

17は連弧文土器で、口唇部直下に交互刺突文を施す。

18～20は堀之内Ⅰ式土器である。18、19は集合沈線により懸垂文を描く。20は深鉢形土器の胴部上半に施される蕨手文である。

#### j・kトレンチ（第293図）

j・kトレンチは後期集落の東端部の様相を確認するために設定した。トレンチでは住居跡と想定されるプランを2か所と多数の土坑群を検出した。住居跡と思われるプランの覆土中には堀之内Ⅰ式期の遺物が主体的に含まれ、遺構は当該期に帰属すると考えられる。

なお、本調査区の東側の内容確認調査においては、縄文時代の遺構・遺物が検出されず、jトレンチ付近が後期集落の東端と考えられる。

kトレンチは遺跡内にある石戸浄水場（桶川北本水道企業団）の敷地に沿って南北方向に設定した。トレンチは台地低位面からやや内陸部の平坦面に位置している。調査の結果、このエリアからは中期の土坑群が確認された。

土坑中には、勝坂式、阿玉台式の遺物を包含する遺構が存在していた。特に阿玉台式期の土坑については、Ⅱ区cトレンチで検出された住居状遺構との関連を示唆する。

#### jトレンチ出土土器（第293図）

1～4は朝顔形を呈する深鉢形土器である。1は口唇部が強く内屈し、沈線が廻らされる。直下に刻みをもつ隆帯を施す。2は口縁部を廻る沈線から縄文帯が垂下する。3は口縁部に広い無文帯を有する。4は半裁竹管による弧状のモチーフが描かれる。

5、6は直線的に立ち上がる器形の粗製の深鉢形土器である。ともに沈線による格子目文が描かれる。

7～9は深鉢形土器に描かれる縄文帯による幾何学文である。

10、11は地文にLRの単節縄文を施し、蕨手文を描く粗製の深鉢形土器である。

12は注口土器の胴部片である。沈線による弧状のモチーフが描かれる。

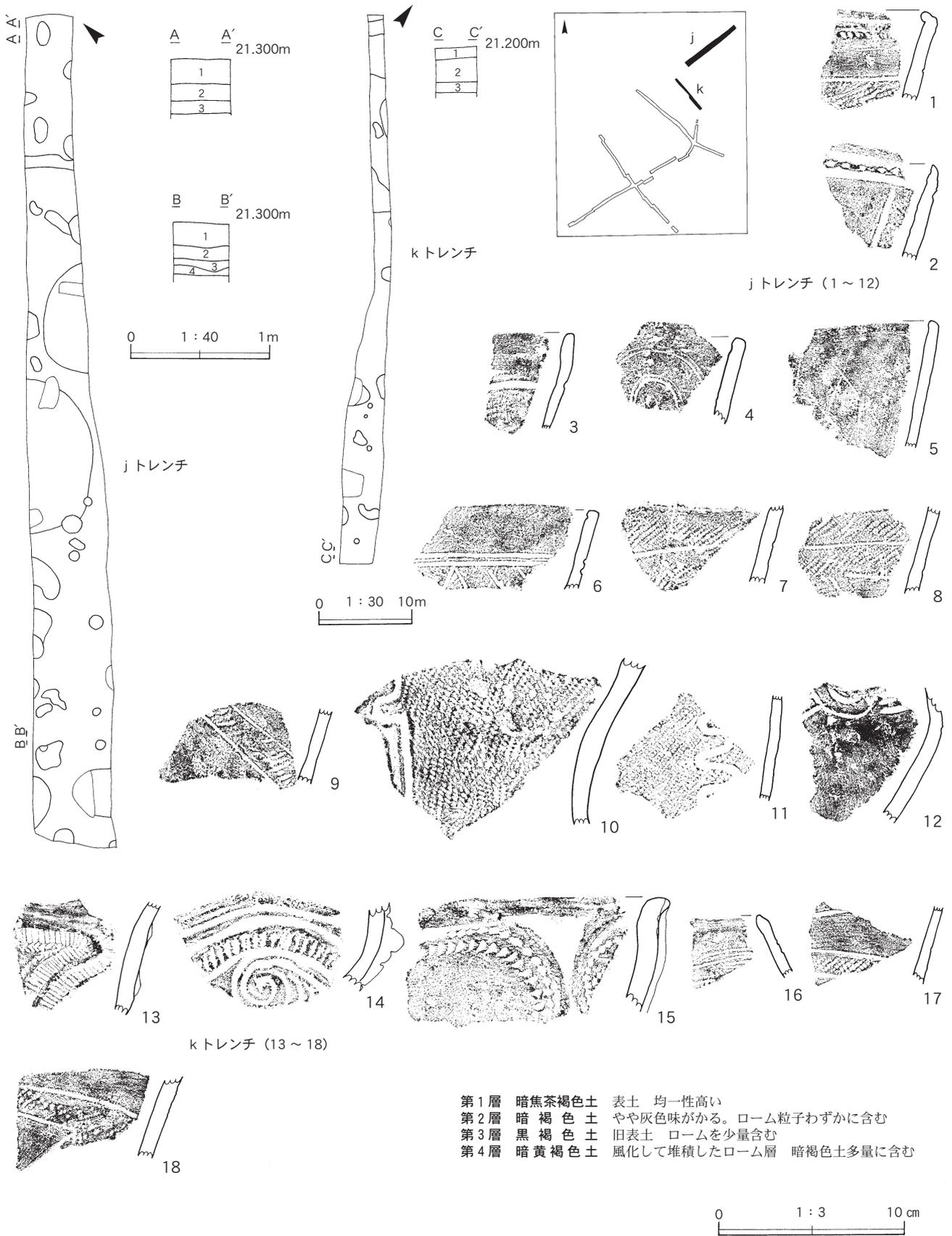
#### kトレンチ出土土器（第293図）

13は勝坂Ⅱ式の土器である。褶曲する隆帯脇に爪形文を施す。14は勝坂Ⅲ式の土器である。刻みを有する弧状の隆帯が区画文を描き、内部は沈線による渦巻文を充填する。

15は阿玉台Ⅱ式の土器である。連続する楕円形区画文の隆帯に沿って角押文と三角押文を並列して施す。

16～18は堀之内Ⅱ式の土器である。16は注口土器の口縁部と考えられ、口唇部が肥厚する。

17・18は深鉢形土器の胴部片で、幾何学文が描かれる。



第293図 II区 j・k トレンチ・同出土遺物

## 第4節 III区の調査

調査は集落北部の台地低位面及び低地部について、詳細な構造を明らかにするために実施した。調査実施箇所を便宜的にC～E地点とし、それぞれ遺構確認面まで重機による掘削を行い、人力による遺構プランを検出した後、遺物の出土状態、遺物包含層の堆積状態などを記録し、調査後は掘削土による埋め戻しを行い保存した。

### C地点（第294図）

CトレンチはII区のgトレンチを北側に延長し、堀之内I・II式期の集落が所在する台地から低位面に至る様相を確認するために設定した。調査の結果、台地斜面に堀之内I・II式期の土器集中が認められ、低位面まで遺物が散布する様相がうかがえ、調査区付近は縄文後期の遺物包含層として認識された。

### C地点出土土器（第294図）

1、2は深鉢形土器の口縁部片である。ともに口唇部直下に沈線が廻る。3～5は胴部片で地文上に沈線による懸垂文が描かれる。これらは堀之内I式である。6～15は堀之内II式の土器である。6、7は胴部に幾何学文が描かれ、口唇部はいずれも内屈する。8、9は深鉢形の粗製土器である。8は口唇部に円形の刺突文を施す。いずれも沈線による懸垂文を描く。10～12は縄文帯による幾何学文の一部である。13～15は沈線による幾何学文が描かれる。16は堀之内I式の注口土器の口縁部片である。刺突文を加えた隆帯が十字に交差する。17は注口土器の把手部である。

### D地点（第295・296図）

D地点はかつて「デーノタメ」と称された湧水池付近に位置し、旧湧水池周辺における縄文時代の泥炭層の遺存状況を確認するために調査を行った。

調査区全体の傾向として、基盤となる粘土層の上に部分的に砂層が堆積し、その直上に堀之内I式～加曾利BI式の遺物を包含する木本泥炭層が堆積していた。この木本泥炭層の上層には無遺物層である草本泥炭層が堆積する。

調査では土器、石器等の遺物の他、植物遺体の出土も認められ、クリ、トチノキの果皮、クルミ核の出土が確認された。

なお、草本泥炭層（8層）の上面には二ツ岳起源に比定されるテフラが確認された。また、9層では花粉分析と年代測定を行い、加曾利BII式期に比定されている（第VI章第3節（2）参照）。

### D地点出土土器（第297・298図）

基盤層である白色粘土層の上部に堆積する砂層（20層）及びその上層の木本泥炭層（9層・18層）から出土した土器である。下層の砂層からは主に縄文中期と後期の遺物が出土し、その上層の泥炭層からは後期の土器が出土している。

1は勝坂Ⅲ式土器である。沈線による区画文が描かれ、角押文や半肉彫状の三叉文を施す。2、3は阿玉台式土器である。2は口縁部片で端部に刻みを施す。3は胴部片で刻目文と断面が三角形の懸垂文を施す。

4～9は加曾利EⅠ式の口縁部片である。4～6は2本隆帯による横位のモチーフを主文様として描いている。7は地文がRLの単節縄文である。8は横位の撚糸文を施し、9は条線を充填する。10は加曾利EⅢ

式の口縁部片で、弧状の隆帯による区画内は地文が磨り消される。

11、12は平行する隆帯による懸垂文を施す。11は短沈線が懸垂文を連結する。13は蛇行隆帯による懸垂文である。14は平行する沈線間に列点を施す。

15～26は堀之内Ⅰ式の土器である。15、16は同一個体であろう。口唇部直下に沈線が廻り、集合沈線による懸垂文を描く。17は頸部の屈曲部から弧状の集合沈線が対向して垂下する。18は波頂部に貫通孔を有し、直下から懸垂文を施す。19は口縁の突起部直下に対向する刺突文を施し、蕨手文を垂下する。20は小突起を有し、内面に円孔を穿つ。21は縦位の懸垂文間に刺突を連続して加えている。22は沈線による方形の区画文を施す。23は口唇部直下に円形の刺突列が廻る。24は褶曲する沈線文を単線で描く。25は刻みを有する隆帯が縦位の区画文を構成し、斜位の多条文を鋸歯状に施す。26は胴部に描いた集合沈線による懸垂文である。

27～29は堀之内Ⅱ式の土器である。27、28は縄文帯による幾何学文の一部である。29は粗製土器の胴部片で、平行沈線による懸垂文が描かれる。

30は底部片で網代痕が残される。

31は加曾利Ⅰ式の深鉢形土器で、平行する縄文帯が弧線により結節される。

32は阿玉台Ⅰb式の土器である。波状口縁で無文であるが、器面には輪積痕を残している。

33～40は堀之内Ⅰ式土器である。33は波状口縁で、表裏に円孔を穿つ。34は波頂部に押圧を加えている。35は口唇部端がやや外反する。36は縦位の区画文内に蛇行沈線を垂下する。37は沈線による方形の区画文内に集合沈線を充填する。38は深鉢形土器の胴部片で、沈線による渦巻文を描く。39、40は底部付近の資料で、集合沈線による懸垂文を施す。

41は堀之内Ⅱ式の深鉢形土器である。縄文帯による幾何学文を描いている。

42は堀之内Ⅰ式の注口土器の胴部片で、楕円形区画文が刺突文を挟んで対向する。43は注口部である。

44～55は加曾利Ⅰ式の土器である。焦茶褐色を呈する木本泥炭層（9層）より出土した。D地点南西隅から集中して出土している。44～49は深鉢形土器の口縁部片である。44は口唇部に刻みを施し、直下に刻みのある隆帯が横位に廻る。45、46は平行する縄文帯を描き、縦位の弧線がそれぞれを結節すると想定される。47は口縁部が内屈し、内面に微隆帯が廻る。48、49は口唇部直下に無文帯を有し、横位の縄文帯を廻らせる。50は深鉢形土器の胴部片である。地文にRLの単節縄文を施し、沈線により横位の文様帯を描く。51、52は浅鉢形土器の口縁部片である。51は口唇部直下に無文帯を設けて沈線により区画し、胴部は地文のみを施す。52は口縁部が強く内屈する。口唇端には刻みを有する。53～54は深鉢形の粗製土器である。53は口唇部直下に紐線文を施す。54は口唇部直下まで地文を施し、胴部は半裁竹管により格子状の沈線文を描く。55は胴部片である。

56は浅鉢形土器である。口縁部文様帯は横位の対向する弧線文を主文様として、これを縦位の短沈線が結合する。頸部は強く屈曲し、胴部は無文である。

#### E地点（第299・300図）

E地点は縄文中期の環状集落の北東に湾入する台地低位面の様相を明らかにするために調査を行った。その結果、大別して2層の遺物包含層を確認した。上層の黒褐色土層では主として加曾利Ⅰ式及び加曾利Ⅱ式の土器が含まれ、堀之内式土器の混在も確認される。また、下層の暗茶褐色土層では主として勝坂Ⅲ式、加曾利Ⅰ式、Ⅱ式の土器が出土する。

遺物の出土状態と範囲から、このエリアが縄文時代中期から後期にかけて、土器の廃棄場として機能していた可能性がうかがえる。

**E 地点第3層（下層）出土土器（第301図）**

1、2は勝坂Ⅱ式である。1は波状口縁で、口縁部は強く外反する。隆帯に沿って爪形文を施す。2は楕円形の突起部である。円形の隆帯を前面に貼付し爪形文を施す。3は山形状の突起部で無文である。口唇部が肥厚し外反する。

4、5は阿玉台Ⅱ式土器である。4は口縁部片で2列の有節沈線を区画内に沿って施す。5は角押文が描かれる。

6～19は加曾利EⅠ式の土器である。6は突起部であると思われる。左右から横走る2本隆帯が結節して突出する。対向する楕円形区画文を非対称に配置する。7、8は横位の2本隆帯が口縁部文様帯を上下に二分し、7は端部が渦巻文となる。9は平面的な繋ぎ弧文を描く。10、11は2本隆帯による弧状のモチーフが口唇部と結節する。12は口唇部直下の隆帯が外側へ庇状に張り出す。13は小型の深鉢形土器である。14～16は区画文内に条線を充填する。17は隆帯による渦巻文を描く。18、19は胴部片である。19は蛇行隆帯による懸垂文を描く。

20は連弧文土器の口縁部片である。口唇部直下に交互刺突文を廻らせ、弧線文が横位の沈線から派生する。21は加曾利EⅢ式の胴部片で、磨り消しによる無文となる。

**E 地点第2層（上層）出土土器（第301図）**

22は阿玉台Ⅱ式の土器で、区画文内に2列の小波状の有節沈線文が施される。

23、24は堀之内Ⅱ式の粗製土器である。23は口唇直下に無文帯を有し紐線文を廻らせる。24は沈線による格子目文を施す。

25～30は加曾利BⅠ式土器である。25は口唇部に刻みを有し、直下には平行する縄文帯を廻らせる。26は沈線による横位の文様帯が描くと考えられる。27、28は口唇部直下に紐線文を廻らせる深鉢形土器である。29は胴部片でLRの単節縄文を施す。30は底部片で底面に網代痕が残される。

**E 地点トレンチ出土土器（第302図）**

31は諸磯c式の土器である。集合沈線による地文を施す。

32～34は阿玉台式土器である。32、33は隆帯に沿って1列の角押文を施す。阿玉台Ib式である。34は区画内に2列の角押文が描かれる。

35は勝坂Ⅲ式の土器である。刻みのある隆帯に沿って爪形文を施し、隆帯から楕円形の貼付文が派生する。鋸歯状の爪形文を複数列描く。

36は大木式系の土器である。口縁部片で半裁竹管による2列の逆U字状のモチーフを描く。

37は加曾利EⅠ式の口縁部片で、隆帯による区画文を描く。38は連弧文土器の口縁部片である。口唇部直下に交互刺突文を描く。39、40は加曾利EⅢ式の土器である。縄文帯と無文帯を交互に配置する。

41は堀之内Ⅱ式土器である。口唇部直下に無文帯を配し紐線文を廻らせる。42は加曾利BⅠ式である。縦位の短沈線が縄文帯を繋いでいる。

**E 地点第3層（下層）出土土器（第302図）**

43は諸磯c式の土器である。集合沈線による鋸歯状のモチーフの端部に円形貼付文を施す。

44、45は阿玉台Ib式である。44は波状口縁である。波頂部には口唇部から派生した隆帯が渦巻状となって対向し突起となる。突起からは隆帯が垂下し、角押文、刻目文を横位に施す。45は口唇部が外反する。屈

曲部に三角押文を施し小波状の沈線文を描く。46は2列の角押文を波状口縁に沿って施す。阿玉台Ⅱ式である。47は隆帯に沿って爪形文を施す。阿玉台Ⅲ式である。

48、49は勝坂Ⅱ式の土器である。48は区画内に連続する列点を充填する。49は爪形文が沿う隆帯により重三角区画文を描く。50は波状口縁で、波頂部から派生した隆帯が途中で刻みをもち、端部が円形に肥厚する。51は刻みを有する隆帯による区画文である。勝坂Ⅲ式に比定される。52、53は隆帯による楕円形横帯文を描く。隆帯上に刻みをもち、区画内は集合沈線が充填される。54、55は円形の貼付文から隆帯が派生し、区画文を描く土器である。54は貼付文に刻みが施される。55は区画内に横位の三叉文を描く。56は縦位の区画文が刻みを有する隆帯により構成する。これらは勝坂Ⅲ式土器である。

57は加曾利 EⅡ式の口縁部片である。口縁部文様帯に方形の区画文を描く。

58は連弧文土器の胴部片である。小波状の弧線文を描く。

59は称名寺式の土器片である。沈線による縦位の懸垂文を描く。

#### E 地点第2層（上層）出土土器（第303図）

60は勝坂Ⅲ式の土器である。口唇部上に隆帯による小突起を配する。

61は堀之内Ⅱ式である。刺突文をもつ隆帯と8字状の貼付文を施し、直下は沈線による幾何学文を描く。

62～65は加曾利 BⅠ式の土器である。62は口唇直下に2列の紐線文が廻る。63はLRの単節縄文を縦横に施し、横位の沈線文を描く。64は深鉢形土器の胴部で、縄文帯を横位に描く。65は小波状の沈線文を施し、上下に対向して帯状の沈線文を描いている。

66～69は加曾利 BⅡ式である。いずれも半円形の弧線文を描く。66は円孔を起点に刺突を有する隆帯と弧線文が派生する。67、68は粗製土器である。

69は底部片で底面に網代痕が残される。

#### E 地点トレンチ出土土器（第303図）

70は諸磯 c 式土器の口縁部片で、口唇部がやや外反する。集合沈線の地文上に楕円形の貼付文を施す。

71は勝坂Ⅲ式土器の山形状突起である。左側縁に楕円形の孔を配し、裏面に三叉文を施す。72は刻みを有する隆帯により弧状の区画文を描く。

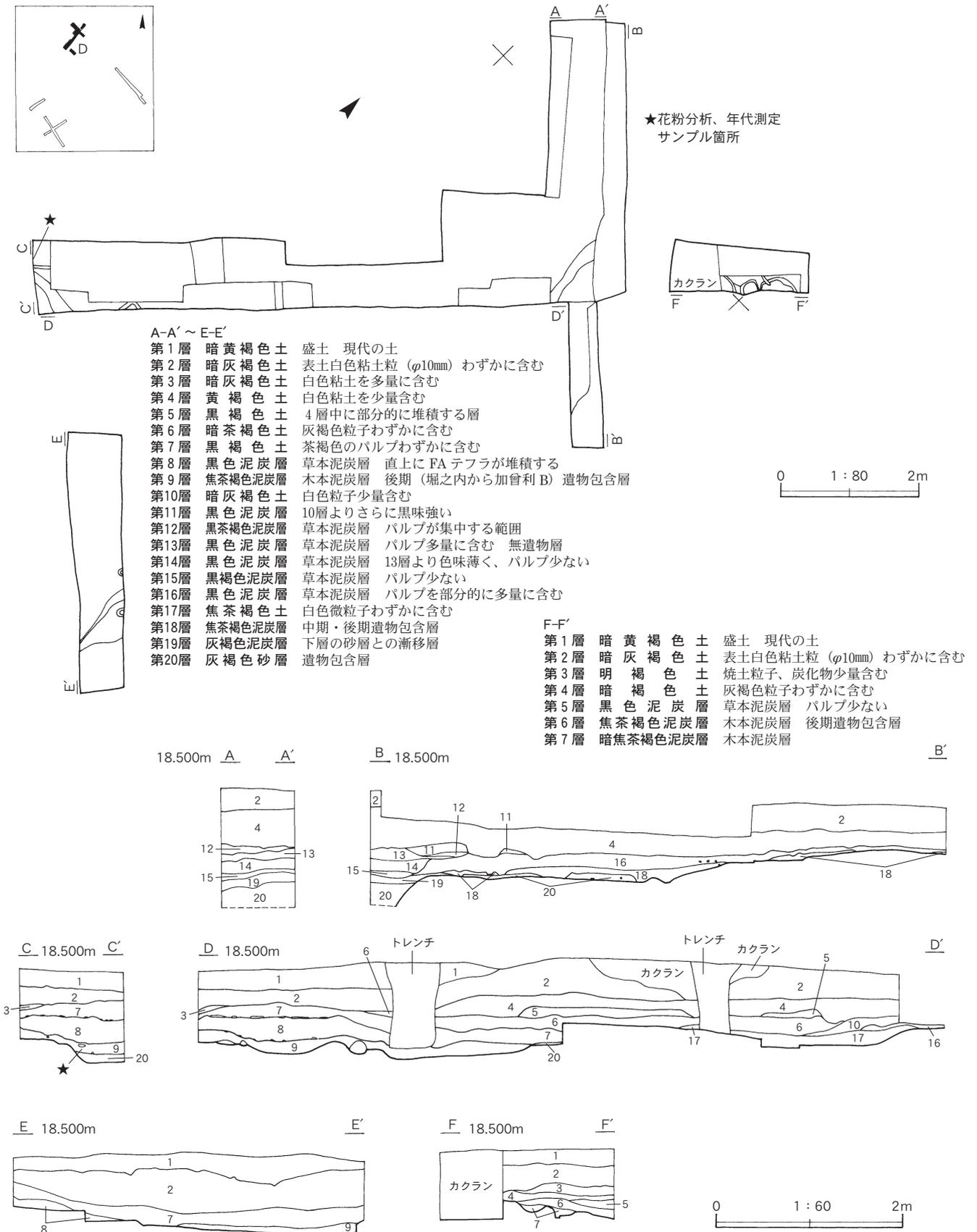
73は阿玉台 I b 式の土器である。隆帯による楕円形区画文内に沿って有節沈線文を施す。74は集合沈線による蛇行沈線文を描く。

75は加曾利 E 式の口縁部片である。76は大木 8b 式と思われる口縁部片で、波頂部が縦位に肥厚し、これを挟んで対向する横位の蕨手状沈線を描く。

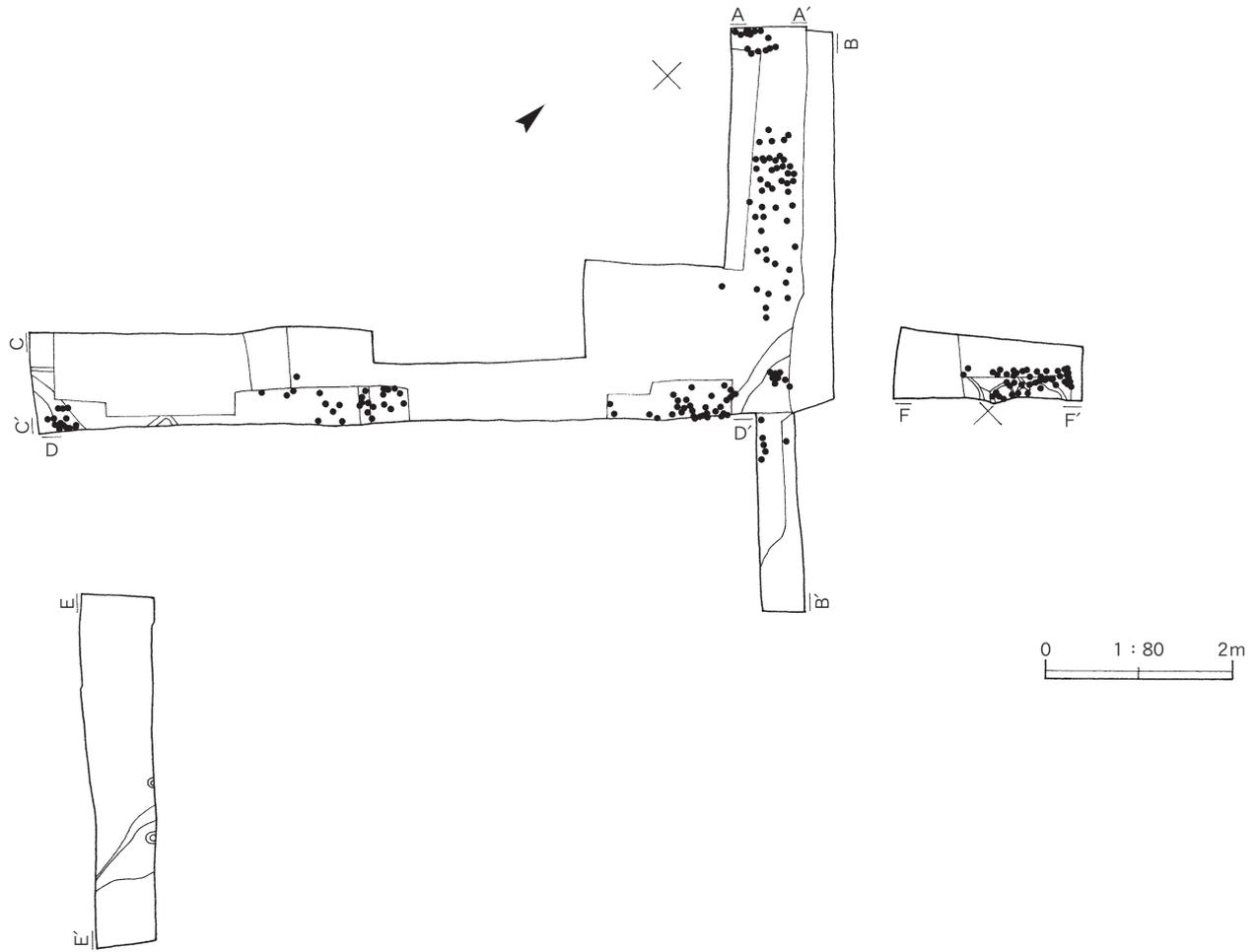
77～80は加曾利 BⅠ式の土器である。77は地文上に沈線を横走させ、平行する文様帯を描く。78は浅鉢形土器であろう。屈曲部の直下に縄文帯を廻らせる。口唇部からは弧状の沈線文が垂下する。79、80は紐線文が廻る深鉢形土器である。



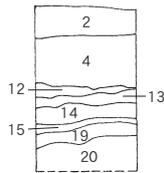
第294図 Ⅲ区C地点トレンチ・同出土遺物



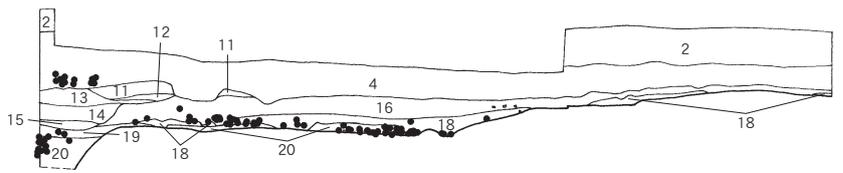
第295図 Ⅲ区D地点トレンチ



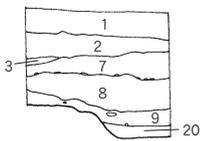
18.500m A A'



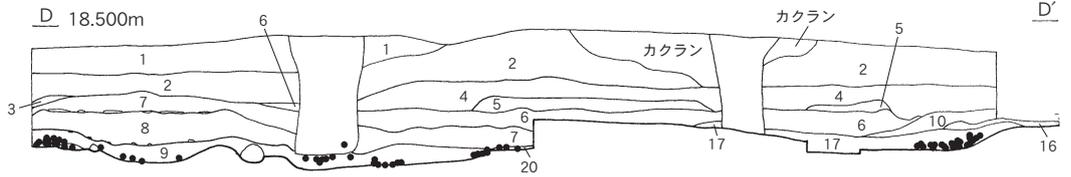
B. 18.500m B'



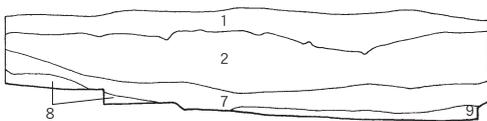
C. 18.500m C'



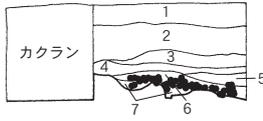
D. 18.500m D'



E. 18.500m E'

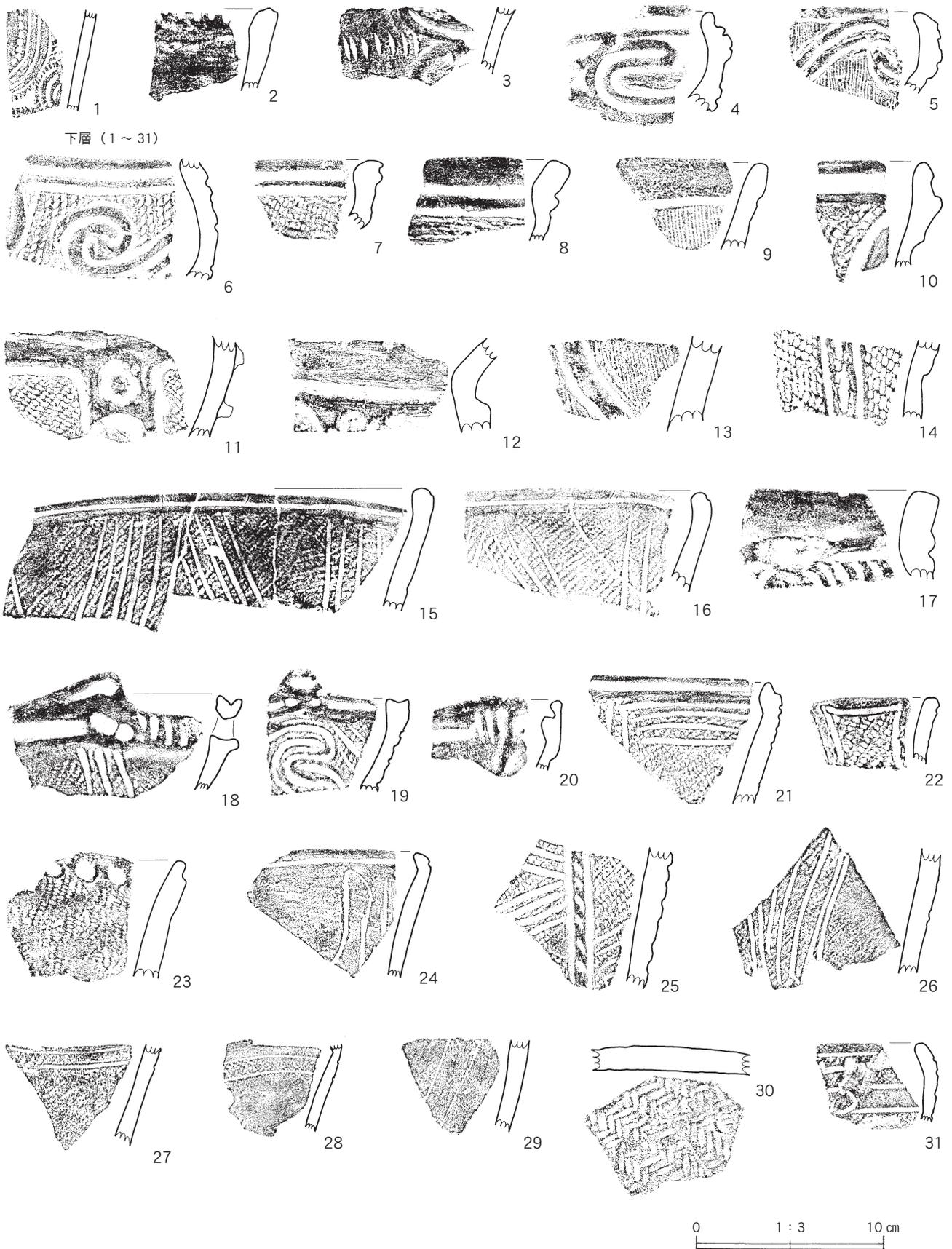


F. 18.500m F'

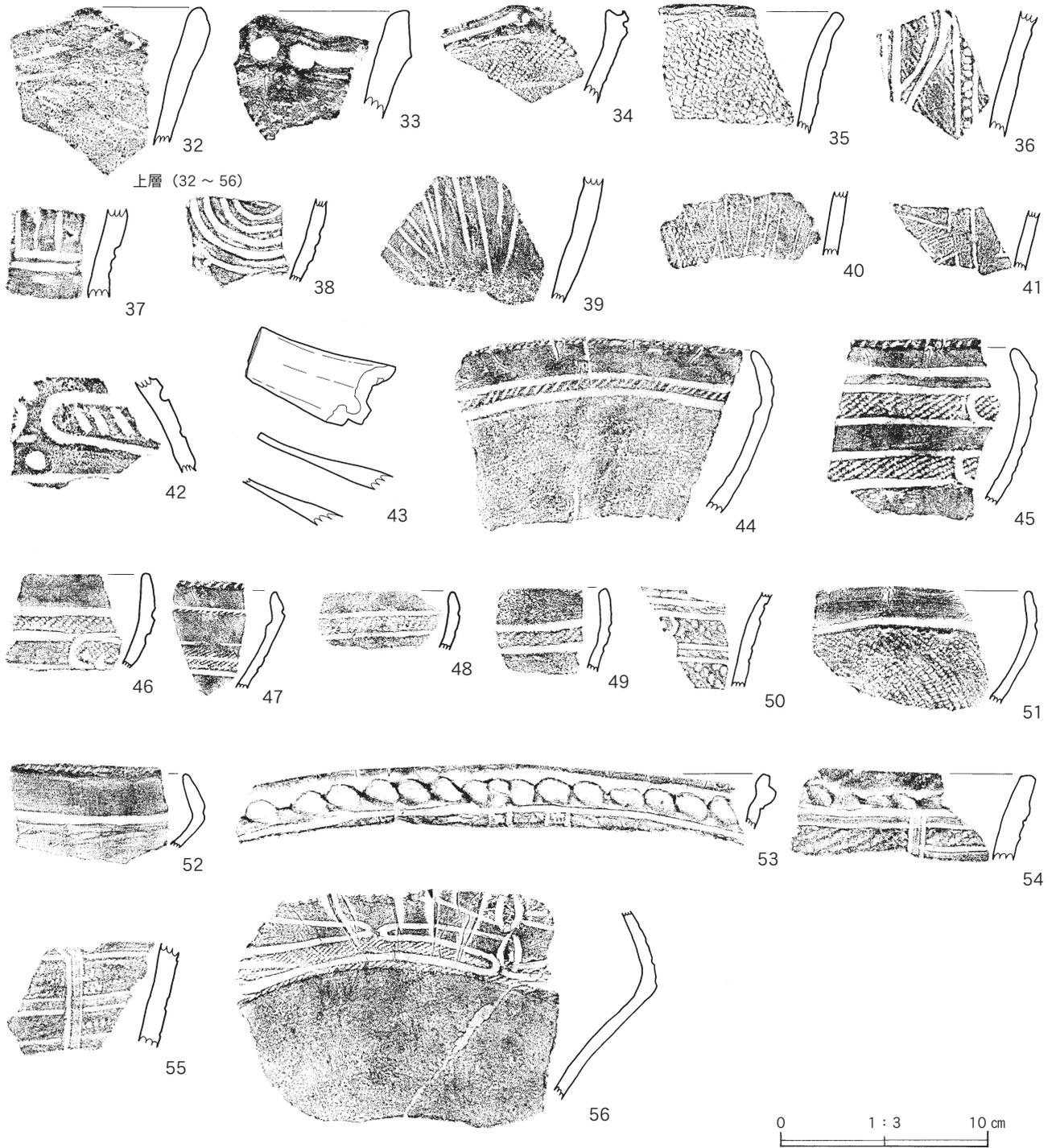


0 1 : 60 2m

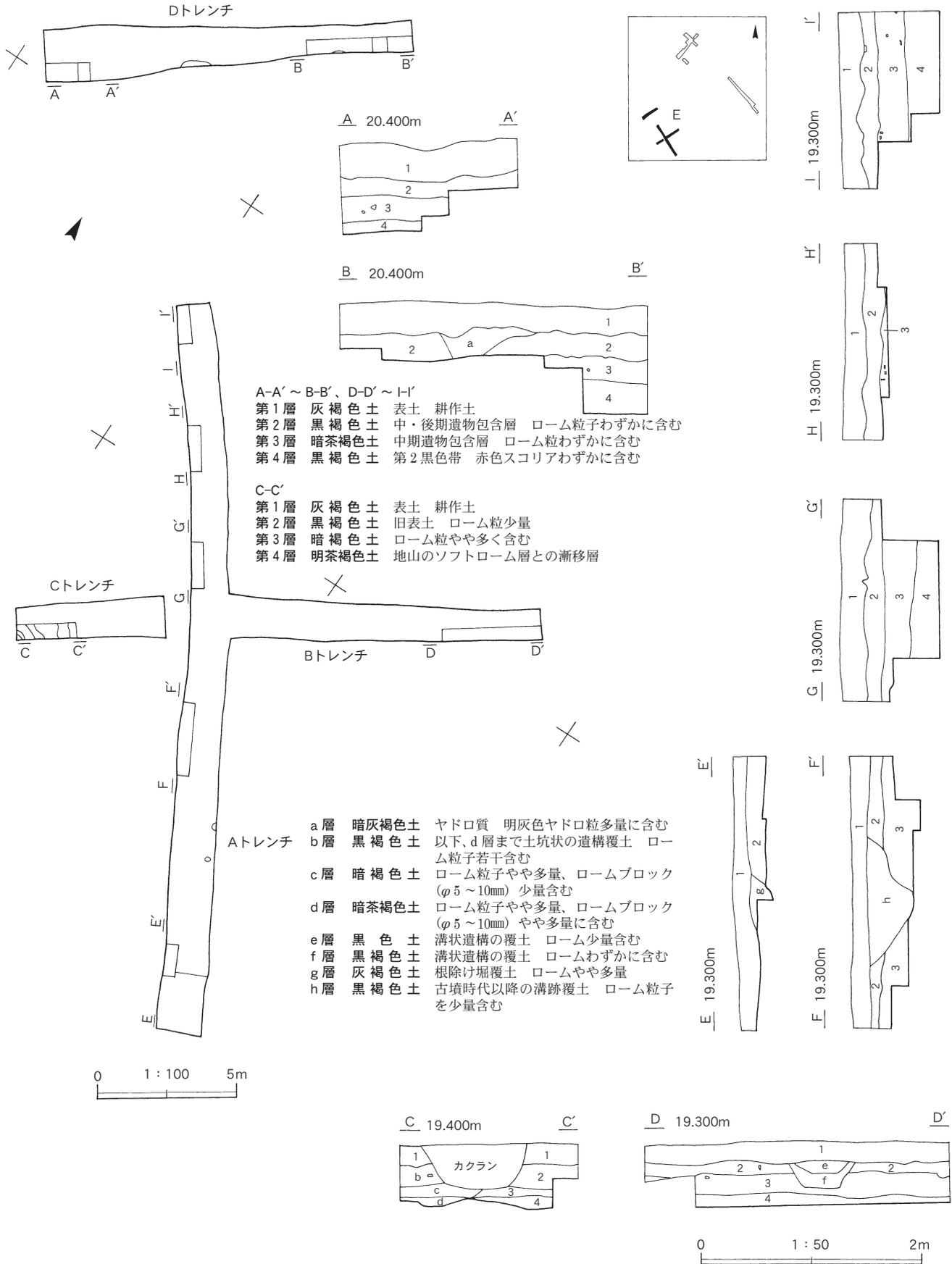
第296図 Ⅲ区D地点遺物出土状況



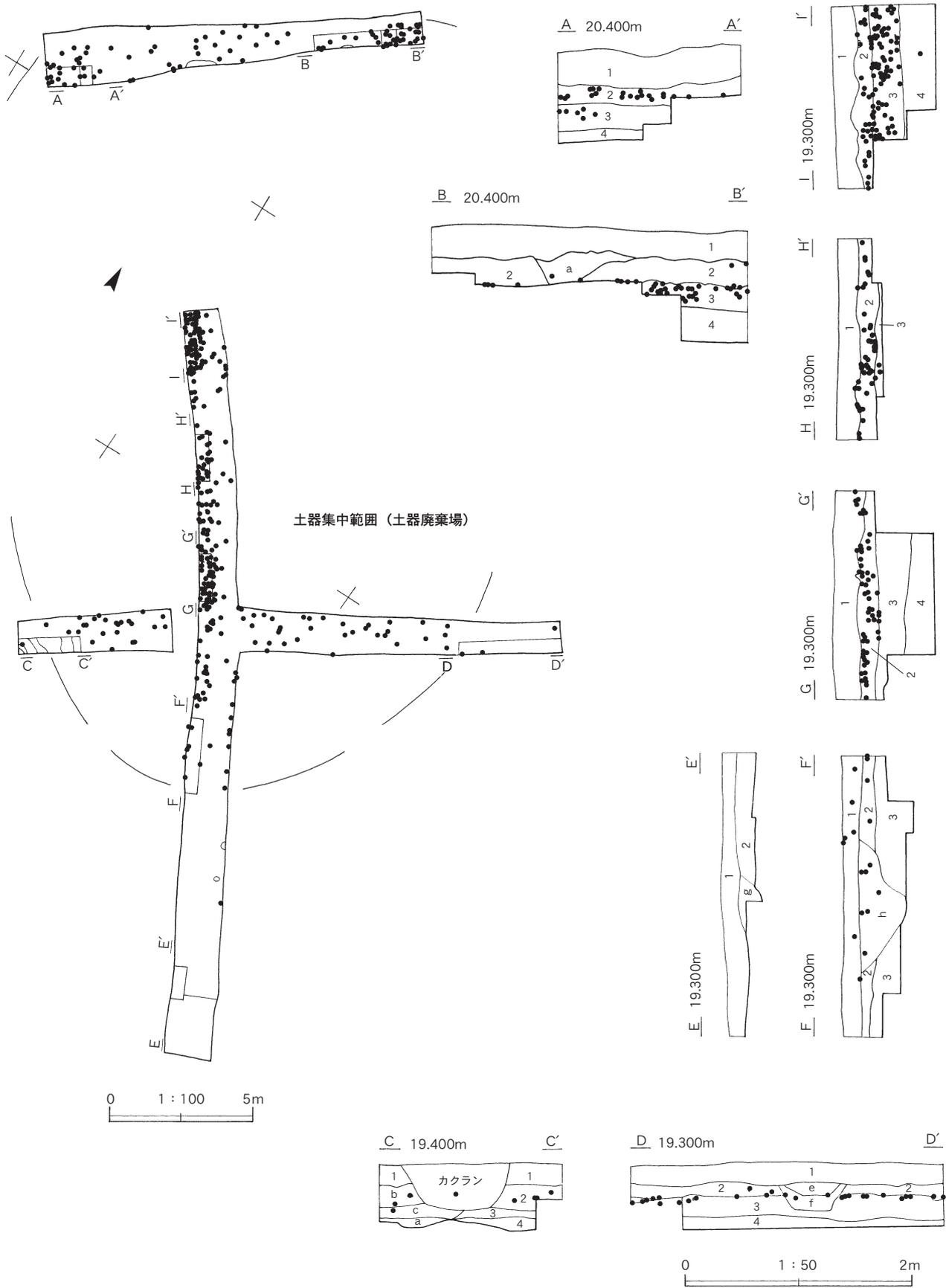
第297図 Ⅲ区D地点出土土器 (1)



第298図 Ⅲ区D地点出土遺物(2)



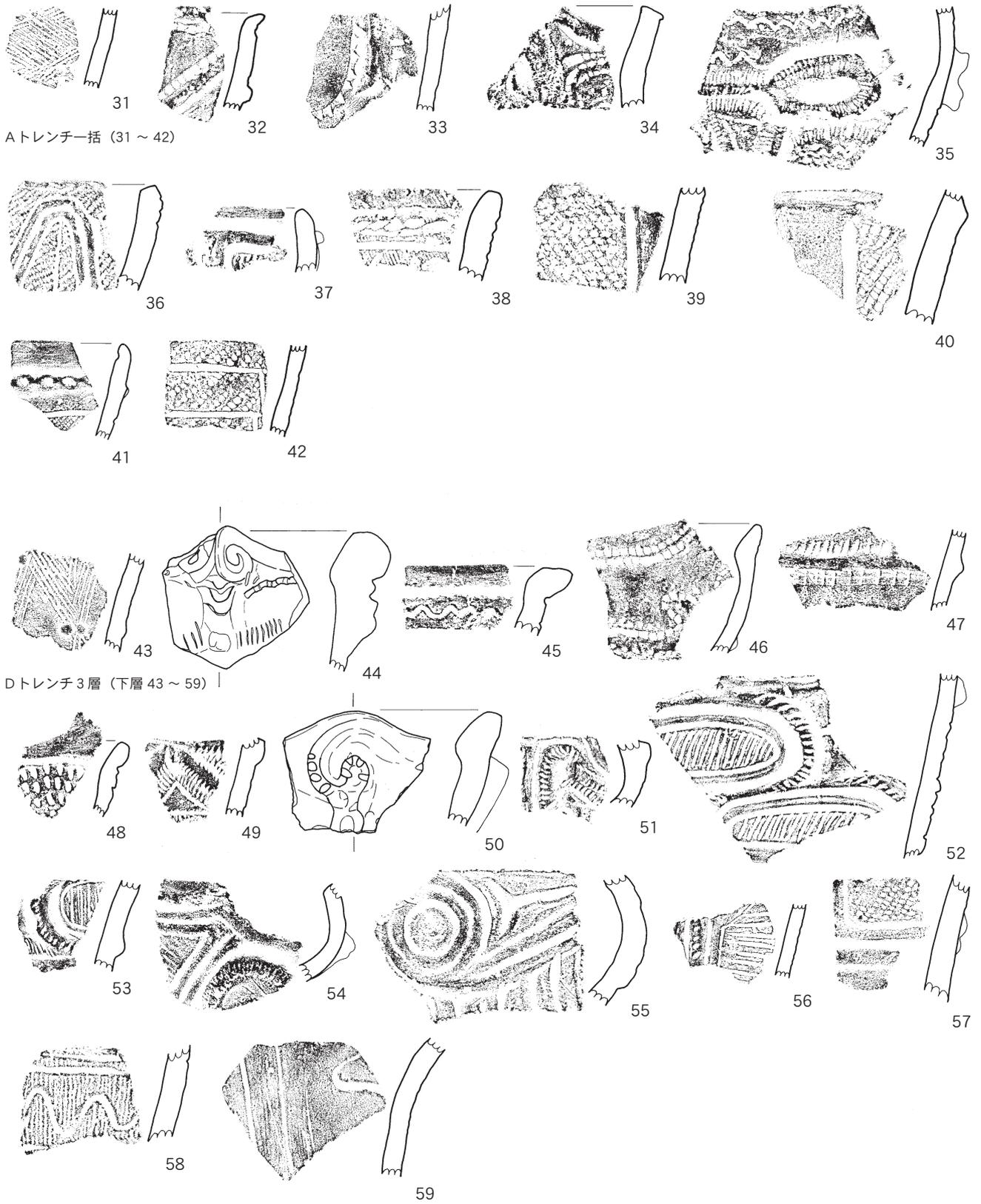
第299図 Ⅲ区E地点トレンチ



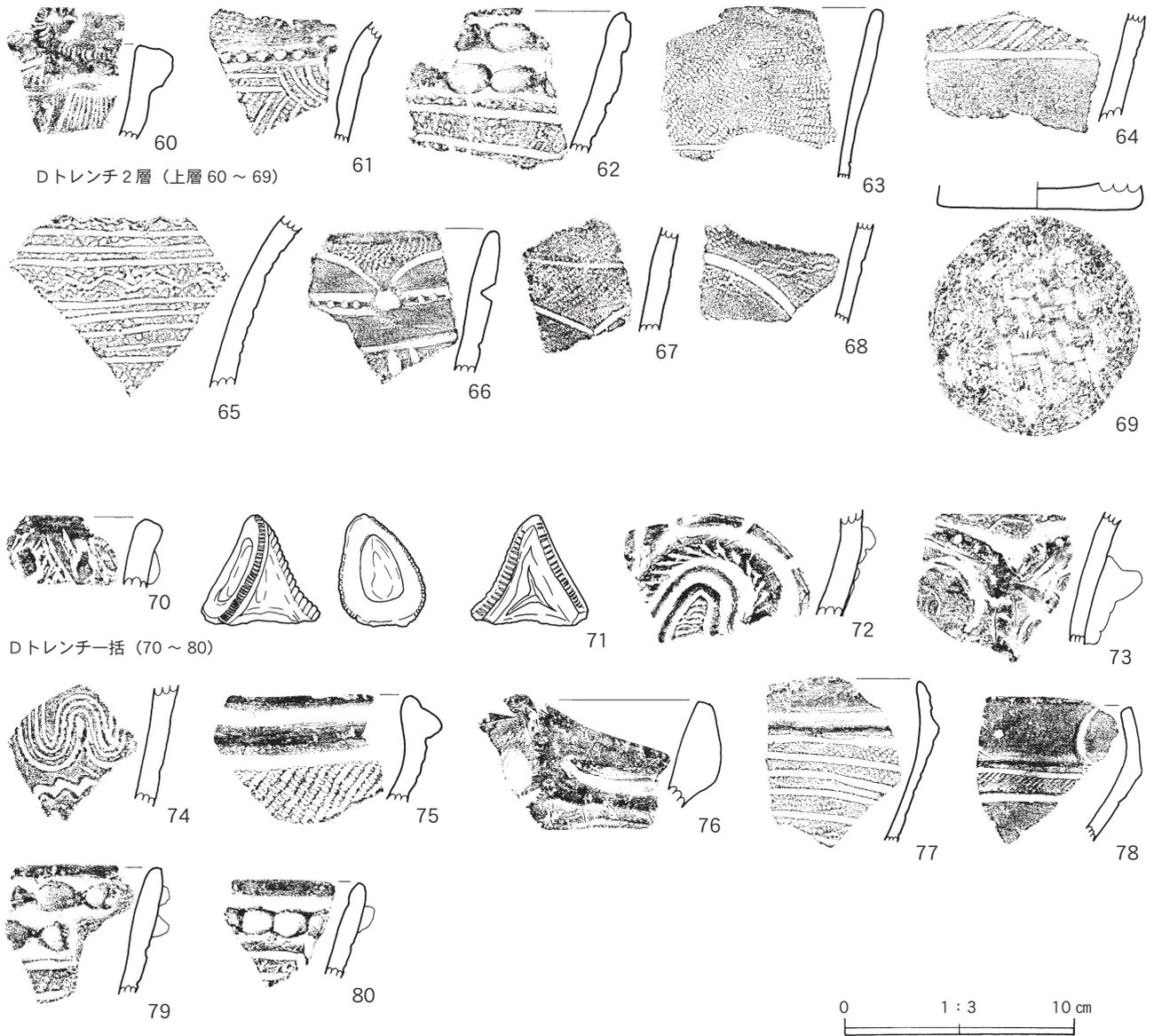
第300図 Ⅲ区E地点遺物出土状況



第301図 Ⅲ区E地点3層(下層)・2層(上層)出土土器



第302図 Ⅲ区E地点Aトレンチ一括・3層(下層)出土土器



第303図 Ⅲ区E地点2層(上層)一括出土土器



## 報 告 書 抄 録

フリガナ	デーノタメイセキソウカツホウコクシヨ							
書名	デーノタメ遺跡総括報告書							
副書名								
シリーズ	北本市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者	磯野治司・齊藤成元・坂田敏行							
編集機関	北本市教育委員会							
所在地	〒364-8633 北本市本町1丁目111番地 TEL 048(591)1111							
発行日	令和元(2019)年9月30日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
デーノタメイセキ デーノタメ遺跡	キタモトシオオアザ 北本市大字 シモイシトシモ 下石戸下 パンチホカ 643番地外	11233 (16)	039	36° 0′ 55″	139° 32′ 18″	20001204 ～ 20171215	3,470㎡	土地区画整理事業 内容確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
デーノタメ遺跡	集落跡	縄文時代 中期 後期	*発掘調査 中期住居跡 24軒 後期住居跡 1軒 土坑 167基 伏鉢 1基 クルミ塚 6基 トチ塚 1基 砂道 1条 木組遺構 1基 杭列 2条 溝跡 6条  *内容確認調査 中期住居跡 19軒 後期住居跡 19軒 石器廃棄土坑 1基 土器廃棄土坑 1基 土器廃棄場 1か所	*発掘調査 土器・石器 300箱 漆塗土器片 約1,000点 木胎漆器等 20点 木胎漆器裝飾部 1点 木胎漆器腕輪 1点 木製品 50点 クルミ形土製品 2点 ミニチュア磨製石斧 3点 ヒスイ製大珠 1点 土製耳飾 7点 圧痕土器 45点 クルミ核 約12,000点 トチノキ種皮 約1,300点  *内容確認調査 土器 22箱 石器 3箱			・中期集落は長軸で約210mを超える関東地方最大級の環状集落である。 ・後期集落は弧状に展開し弦長で約270mと大規模である。 ・中期・後期集落がほぼ完全に残されている数少ない遺跡である。 ・中期・後期集落に伴う低地遺跡が良好に残されている。 ・低地遺跡では豊富な有機質遺物が検出され、縄文人の植物利用を具体的に証明する成果を得た。	

北本市埋蔵文化財調査報告書 第22集

デーノタメ遺跡総括報告書

(第1分冊)

---

令和元年(2019)9月29日 印刷

令和元年(2019)9月30日 発行

発行 埼玉県北本市教育委員会

〒364-8633 北本市本町1-111

TEL 048-591-1111

印刷 朝日印刷工業株式会社